愛媛大学教育学部

第135号

同窓会報

愛媛大学教育学部同窓会事務局
〒790-8577 松山市文京町３番
愛媛大学教育学部事務課内
☎(089)927－9383(直通) FAX(089)927－9395
E-mail:dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀春

元旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同

先の見えない時代を生き抜くために

愛媛大学
教育学部長
小助川元太

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

二〇二〇年の一月ごろから始まった世界的な新型コロナウイルスの感染拡大から、すでに三年が経とうとしています。最近、ふたたび感染者が増加していることや、アメリカでは感染力の強い新たな変異種が急速に拡大しているというニュースが入ってきていることなど、今後もまだ終わりの見えない状況が続きそうですが、発生当初に比べると、ある程度対応がわかってきたことや、国の方針が感染を回避しつつ経済活動も停滞させないというものに切り替わったことなどから、私たちの生活もコロナ禍以前の状態に近づきつつあります。

私が学部長に就任したときは、まさに日本で感染拡大が始まった時期でした。そのため、私が最初にしなければならなかった仕事は、授業や実習、教員の出張、学内外の会議の開催等について、許可・不許可を判断するといった、いわば大学の危機管理に関わるものが中心でした。とくに教育学部の場合、実技科目があるため、すべてを完全な遠隔にすることは不可能であり、必修の教育実習を含む実習をどうするかという、深刻な問題も抱えていました。一方で、最初の一年間は、感染防御に関する確かな情報が少なく、ワクチン接種も進んでいなかったこともあり、何事においても慎重な対応が求められ、苦渋の決断をしたこともしばしばありました。

学生たちに関しては、今の三回生と四回生は一年半の間、二回生は半年間、遠隔授業が中心でした。とくに三回生については、せっかく入学したのに、一年半も友だちが作れないような環境でした。これらの措置は愛媛大学に限らない全国的な傾向であり、やむを得ないことではあったのですが、学生たちには本当に辛い思いをさせたと思います。

ところで、このコロナ禍の体験から、私たちは多くのことを学びました。たとえば、一頃話題となった「自粛警察」といった現象は、極度な感染への恐れと不安、そして行動制限による閉塞的な社会状況が人を他者への攻撃に向かわせるものであることを私たちに教えてくれました。また、Ｚｏｏｍなどの遠隔会議システムの活用は、技術の革新が人類の危機を救ってくれることを示してはくれましたが、かえって画面越しではなく、人と人とが直接会って話すことの大切さに気づかせてくれる機会ともなりました。何よりも、誰かが悪いわけではなく、しかも、先の見えない不安な状況の中でも、それを受け入れながら希望を捨てずに生きていくことの大切さを、多くの人が学んだはずです。

こうした災厄の体験から学ぶということについては、鴨長明『方丈記』に興味深い記述があります。『方丈記』には、「行く河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」で有名な序文と、安元の大火・治承の辻風・都遷り・養和の飢饉・元暦の大地震という、いわゆる五大災厄、そして、都から離れた方丈（一丈四方、すなわち四畳半ぐらいの面積）の住まいでの生活が描かれますが、五大災厄の最後、元暦の大地震の末尾に、以下のようなことが書かれています。

当座は、人々すべてこの世のむなしさを述べて、少しは心の濁りも薄まるかとも見えたけれど、月日が重なり、年が経った後では、口に出して言う人さえいなくなってしまった。

（浅見和彦校訂・訳『方丈記』、ちくま学芸文庫）

長明は『方丈記』の中で、人間が築き上げてきた当たり前の日常が、自然災害や人為的な行為によっていとも簡単に破壊されてしまうようすを描くと同時に、人間の本質的な愚かさや弱さも描いています。とくにこの部分は、極限状況を体験したはずの人々が、次第にそれを忘れてしまうという現実を描いていますが、このことは八〇〇年後の私たちにとっても十分に当てはまることだと思います。コロナ禍以前の生活に近づきつつある今だからこそ、私たちはこの三年間でそれぞれが学んだことを忘れないようにしなければなりません。

昨年は、コロナ禍に加え、ロシアのウクライナ侵攻が始まったり、安倍元首相が銃撃されて亡くなる事件があったりと、ショッキングで嫌なニュースが多く、そのほかにも不安定な国際情勢や円安による景気の悪化など、先行きの見通せない不安な状況が続きました。こうした暗く閉塞的な社会状況は今後も大きくは変わらないものと思われます。このように、これまでの常識が通用しない、先の見えない時代だからこそ、私たちは希望を捨てることなく、人が幸せに生きることのできる新たな社会の形を考えていく必要があります。その際に、コロナ禍で私たちが学んだことは、重要な判断基準となるように感じています。

さて、大学を取り巻く社会状況の変化として、子どもの数の減少により、今後は全国的に学校の再編・統合の動きが加速することが予想されます。地域から学校がなくなることは、その地域にとって大きな打撃ですが、大学にとっても深刻な問題です。近い将来、大学でもこれまでになかったような大幅な再編・統合が進んでいくでしょう。とくに地方国立大学は、とくにそうした「整理」の対象となっているため、愛媛大学としても生き残りをかけて、さまざまな手を打っています。先行き不透明な時代ではありますが、私たち教育学部も、地域における魅力ある教員養成機関として今後も必要とされるよう、教職員一同、力を合わせて頑張ろうと思います。同窓会の皆様には、引き続きご理解とご協力を賜れれば幸いです。

目次

表紙
元愛大教育学部教授……菊川　國夫
「先の見えない時代を生き抜くために」…(1)
愛媛大学教育学部長　小助川元太
心　響……(2)
「地域を愛する小富士っ子の育成」
四国中央市・小富士小学校長　毛利　雅彦
研究室紹介……(3)
教育学部生物研究室　中村　依子
職場だより……(5)
・学び続ける大切さ
四国中央市・松柏小教諭　犬伏　悠真
・「先生」になっての自分
上島町・魚島小教諭　近藤　勇輔
・憧れの教師になって
東温市・南吉井小教諭　小堤　美羽
・教員生活を振り返って
八幡浜市・松柏中教諭　梶田　竜介
・教師になって
宇和島市・吉田中教諭　山口　萌
・教員生活を振り返って
愛南町・福浦小学校長　片山　新也
学部トピックス……(11)
・愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が二つのコンクールで全国大会出場を果たしました
・愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が第七十五回全日本合唱コンクール全国大会で銀賞を受賞しました

心響

地域を愛する小富士っ子の育成

～地域とともにある学校づくり～

四国中央市立
小富士小学校長
毛利　雅彦
（昭六二卒）

「小富士を好きと言える子どもに育ってほしい」。これが、小富士小学校学校運営協議会委員の共通の思いである。

令和三年に小富士小学校に校長として赴任した。本校は、コミュニティ・スクールとなって三年目を迎えようとしている学校であった。前任の校長の下、地域と学校が連携・協働しながら「ふるさとを愛する子ども」を育てることを目標に取り組んできていた。

赴任して最初の学校運営協議会で、「小富士が好き、小富士っていいなあ、と思える子どもたちが増えるよう、地域の力を借りながら、学校と地域、家庭が一緒になって地域とともにある学校づくりをしていきたいので協力をお願いします。」と話をした。

そこで、この二年間、学校運営協議会では熟議を大切にしてきた。テーマは、「地域として小富士っ子のためにできることは？」である。その中で委員から出された意見が、「地域ふれあいふるさと巡り」と「お祭り集会」の実施である。そこに、地域学校協働活動によるスクールサポートボランティア（小富士っ子サポーター）の活用を加え、大きな三本柱とした。

【地域ふれあいふるさと巡り】

小富士地域は、近藤篤山、安藤正楽、白木豊という三先哲を輩出するなど文化と歴史に満ちた地域である。地域には、三先哲に関わる遺構や歴史に関わる遺構が多く残されている。しかし、きちんと整備されているものは少なく、子どもたちも知らないものが多くある。そこで、地域を知り、地域を好きになってほしいと願い計画したのが「地域ふれあいふるさと巡り」である。地域住民と小富士っ子が一緒に地域を巡り、ふれあいを深めることを目標に、三年間で小富士全地域を巡る予定としている。初年度となる今年度は、一月に実施を予定しており、十一月には、学校運営協議会委員と共に下見を行うこととなっている。

【お祭り集会】

東予地域の秋祭りと言えば絢爛豪華で勇壮な太鼓台である。太鼓台文化は、瀬戸内海沿岸に限定的に見られる文化で、四国中央市や近隣の市町では、約二〇〇年前から続く、伝統ある文化である。

しかし、少子化などの影響により、近年太鼓台離れが見られる。掻き夫が減り、太鼓台の維持に苦慮している地域もある。

そこで、伝統文化を受け継いでほしいという地域の願いと太鼓台を通じて地域との交流を深めてほしいという学校の願いから行っているのがお祭り集会である。

コロナ禍とその前数年が祭日と週休日が重なったこともあり、今年は久しぶりのお祭り集会の開催となった。

これまでは子ども太鼓も参加していたが、今年は地域の大人太鼓三台のみの参加となり、計画変更を余儀なくされた。学校運営協議会や公民館運営委員会で協議する中で、子どもたちを太鼓台に乗せて運行し、最後に全員で記念撮影をすることとなった。当日は、天候にも恵まれ、大盛況のお祭り集会となった。

【地域学校協働活動】

「よりよい学校づくりを通してよりよい地域を創る」。新しい指導要領で言われていることであるが、実は、十二年前、社会教育主事講習を愛媛大学で受講した際に、同じような話を伺った。

「地域の人材を活用することで、地域の教育力を高める。」「高齢者にやりがいと生きがいを。」「歳を取っても元気なのは、いろいろなことをしているからだ。」など、社会教育においては、学校教育に地域の人材が入っていくことで、地域の活性化につながると言われてきた。そこに立ちはだかったのが学校側の壁であった。当時の学校には、まだ閉鎖的な雰囲気が残されていたように思う。

本校では、授業や行事に地域の方の協力をお願いするようにしてきた。それは、子どもたちにとってもプラスになり、地域の方にとってもプラスになる。つまり、学校にとっても、地域にとっても「WIN　WIN」の関係である。

令和三年度は、コロナ禍の制約は受けたものの、地域の消防団と交流したり、図工の授業支援に入っていただいたりした。剪定や草刈りなどの環境整備もしていただいた。月二回木曜日の朝には、読み聞かせにも来ていただいた。

Withコロナとなった今年度は、「できることをできる範囲で」を合言葉に、昨年以上に授業支援に入っていただいたり、見学などの引率や講師をお願いしたりした。一年生の「昔遊び体験」、二年生の「水生生物探し」「まち探検」、三年生の「公民館見学」、四年生の「防災聞き取り学習」、五年生の「しめ縄づくり」、六年生の「地域の歴史探訪」など。

前任の校長のおかげで、地域のスタッフはそろっていた。後は、教職員の意識変革。コロナ禍で制約はあったが、「できることをできる範囲で」を合言葉に、とにかく地域との連携・協働を図った二年間であった。

「小富士を愛する子どもを育てたい」。地域と学校の思いは同じ。今後も連携・協働しながら更に歩みを進めたい。

・愛媛大学教育学部附属学校園で合同避難訓練を実施しました
・愛媛大学附属高校のプラガールズが国連の国際会議で発表しました
教育学部生の思い……⑬
・「大学生活を振り返って」初等教育コース　阿部　眞子
表紙のことば……⑬
部活動紹介……⑭
フラワーデザイン研究会
先輩を偲ぶ……⑮
「あしあと(8)」先輩たちのあしあと　同窓会事務局
会員の声……⑰
・「そして、戦後」……井手窪　理
・『教行信証』に新しく校閲された訳者の序論」……吉原　宏文
俳　句……㉑
句集『正面』より……島津　教恵
愛媛県女子師範学校校舎を訪ねて……㉒
附属祭……㉓
校友会ニュース……㉕
放送大学・会報送料……㉗
敬弔・寄付者名・叙勲……㉘
裏表紙……㉙
会員写真館

研究室紹介

愛媛大学教育学部 生物研究室

准教授　中村　依子　先生

1　はじめに

愛媛大学教育学部理科教育講座生物研究室は、城北キャンパスの学生食堂の目の前にあり、研究室に泊まり込んで研究に没頭できるという、恵まれた研究環境にある。さらに、研究室には蛍光顕微鏡や遺伝子組み換え実験のための機器類などが揃っており、設備も申し分ない。この環境を活用して、学生には少しの間でも大学でしかできない研究に没頭して欲しいと思う。

私は学生の時から、ウニ、ホヤ、カエル（アフリカツメガエル、ツチガエル）と、複数種のモデル生物を研究材料として使い研究を行ってきた。そして、愛媛大学に赴任してから、小学校教員養成課程の学生を指導することもあり（当時の学部長に、「カエルではなく、メダカにしなよ」、と言われたこともあり）、メダカを研究材料として扱うようになった。研究生活を続けていくうち、一つの生物に絞って研究すれば良かったと思ったが、これらの生き物は小学校から高等学校まで理科や生物の教科書で主に扱われている生物教材であり、教育学部の教材研究においては、少々強みとなっている。メダカにおいては、最初はただメダカを飼育することから始めた。著名なメダカの研究者や研究所からご教示を受けながら一人で試行錯誤を繰り返しているうち、研究テーマとしてメダカに興味をもつ学生が一人、また一人と現れ始めた。今では基礎研究も含め、メダカについての研究が大部分を占めるようになっている。

2　研究内容

生物研究室では、生物教育における生物教材の研究と生物分野における基礎研究を行っている。最近の成果を報告する。

(1)　生物教材の研究

生物教材の研究では、これまでにメダカ、アフリカツメガエル、DNA関連の研究を主に行ってきた。

①　ウニやカエルの初期胚の固定胚の教材は高校生物の教材として販売されていたが、小学校理科のメダカの初期胚の教材は存在しなかった。そこで私たちは、生きた胚と変わらない外観のヒメダカの固定胚を作製した。それを用いて小学生を対象に附属小学校で授業実践を行った結果、作製した固定胚はいつでも目的の発生段階を観察でき、生きた胚と併用することで、発生段階の認識を補助する教材として有用であることが示された。

②　高校「生物基礎」の教科書では、全社で簡易なDNA抽出実験が扱われている。抽出したDNAが本当にDNAであるかを確かめるためには、DNAを特異的に染色する必要がある。よく行われる電気泳動後のDNAのバンドの染色はエチジウムブロマイドを用いるのが一般的である。しかし、発がん性の疑いがあるため、取り扱いに注意が必要である。これまで試薬作製が手間なく簡便で、安全にDNAを特異的に染色する方法はほぼなかった。愛媛大学に赴任してすぐ、現場の高校の先生から、「DNAを安全に染める方法はないですか?」と聞かれたことが、ずっと頭に残っていた。学校現場で分子生物学的実験が求められる中、安全かつ簡易で、特異的にDNAを染色する実験ができる必要があると考え、それが可能な方法を見出した。ある蛍光色素を滴下して安価なブラックライトを照射すれば、蛍光反応が容易に観察することが可能となった。このメダカとDNA抽出実験については、学会誌の表紙の依頼が舞い込み、表紙を飾ることができた。

③　次項のアフリカツメガエルの初期発生に関する基礎研究と関連して、高校生物のカエルの発生の単元において、実践的研究を行った。胚の内部で起こるダイナミックな形態形成運動である原腸形成の時期に、実物のカエルの胚の内部構造を観察することは重要であると考えられる。しかし、発生の単元では、原腸胚期以降の内部の構造はイラストのみで示されている。また、胚発生の実験観察は、時間が掛かりすぎること、卵が小さすぎて生徒の実験技能では不可能なことにより、高校生物において観察、実験を行うことが難しいとされてきた。そこで私たちは、カエルの原腸胚の向きを揃えて寒天に埋めたブロック状の教材を作製した。そして授業実践で、手作りの模型を用いて寒天の切断法を細かく指示したところ、学生全員が一回で観察可能な切断胚を作製できた。さらに、学生が切断胚をうまく作製できなかった場合でも、観察に切断胚の写真を使うことによって、胚の切断面を観察することができ、かつ時間を掛けずに様々な段階の胚の切断面を観察できると考えられた。授業実践後の質問紙調査の自由記述の結果から、「カエルの発生」の授業に

おいて、生徒にとって分かりやすく、興味・関心を引くためには、実物を観察することができる顕微鏡観察が必要であることが示唆された。

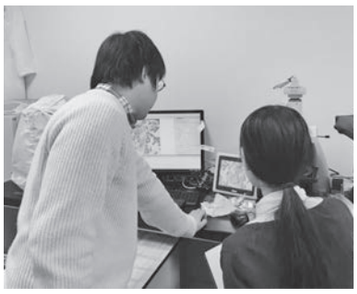
④　卒業研究とは別に、附属中学校と共同研究も行ってきた。附属中学校において、理科（生物）の授業において、自律型学習中心の探究活動でカエルの初期胚発生の観察を行った。オンラインを活用して、その探求活動に、首都圏の研究機関や附属小学校など対話のチャンネルを増やして協働学習を促し、その効果を検証した。授業後の質問紙調査の結果から、学習の理解において生徒は、一人で行う学習や知識伝達型の一斉授業より、他者との交流や学び合いによる学習者中心の学びの方が有効であると感じたことが分かった。

⑤　植物を用いた教材研究も行っており、愛媛県の生産量が全国一位であるキウイを実験材料として、制限酵素実験の開発を目指した。その成果として、新規にキウイのDNA配列を明らかにし、国際的な遺伝子配列のデータベースに、学生の名前とともに登録することができた。

(2)　生物分野における基礎研究

生物分野における基礎研究に関しては、学生が自らメダカとアフリカツメガエルを材料として興味を持ち、研究を行ってきた。

①　高等学校「生物」の教科書に載っているカエルの初期胚発生過程を比較すると、原腸胚期の原腸の位置は様々なものが存在し、実ははっきりしていない。そこで、原腸胚期後期において、原腸がどこに形成されるのかを明らかにすることにした。なぜ原腸の位置に違いが生じるのかと考えた時、卵黄栓が形成される位置に違いがあることに着目した。アフリカツメガエルの原腸胚期前後の発生を植物極側から生きたまま継続的に観察し、卵黄栓の位置を調べた。それとともに、卵黄栓が閉じていく過程で胚を固定した後切断し、卵黄栓が閉じる時の内部の原腸の位置を調べた。その結果、原腸は、多くの教科書にあるような動物半球側でもなく、植物半球側でもなく、将来の背側に位置していることが分かった。



②　メダカの研究では、ヒメダカと、伝統的なd-rR系統を研究材料として用い、屋外と屋内で飼育している。私はメダカの卵が卵巣内でどのように発達するのかを明らかにしたいと考えている。メダカは、繁殖期の卵巣にすべての発達段階の卵母細胞が存在する。それを利用して、各発達段階の卵母細胞について、発達段階と卵巣内の位置との関係を明らかにするため、卵巣の組織標本を作製して卵母細胞の上皮からの距離を計測した。その結果、卵巣上皮はところどころ陥入しており、すべての卵母細胞は背側上皮に接していることが明らかとなった。この結果は、卵母細胞が発達に伴い、背側から離れ、腹側に位置するようになるという、これまでの常識を覆した。

③　メダカやアフリカツメガエル以外では、愛媛県内の著名な先生と共同で、松山市の北条鹿島の植物相や鳥類調査、ため池の生態系の調査、帰化植物種の調査など、（私は専門ではないが）生態系に関する調査を行っている。また、最初の調査から十四年後の松山平野におけるマシジミとタイワンシジミの核ゲノムの違いを判別するDNA解析を行い、マシジミとタイワンシジミの生息状況を調査研究した。これらの研究を通して、地域の自然環境の大切さを見直す機会になっている。

私自身が生物を通じて、国際的にも世界が広がったと同じように、学生も生物や研究に関わることで、教員生活、人生にプラスになることが経験できれば幸いである。

今後は、屋内でも一年中メダカの採卵ができる飼育環境を整え、メダカが孵化後から性成熟するまでの生殖腺の発達過程について解析したいと考えている。

愛媛大学に赴任して今年でちょうど十年目になり、そのような時に、この研究室紹介の機会をいただいた。これまでの研究を振り返り、これからどのように進んで行くのか、改めてしっかり考えるようにと言われているような気がした。

職場だより

学び続ける大切さ

四国中央市
松柏小教諭
犬伏　悠真
（令四卒）

私が教員を目指したきっかけは、小学校六年生の担任との出会いである。児童の夢を全力で応援し、サポートしてくれた、厳しくも愛情深い先生に強く憧れたことを今でも覚えている。中学校、高校でも素晴らしい先生方と出会い、教員への憧れはますます強まり、教育学部を目指すことを決めた。早く教育現場で教鞭をとりたいという思いもあり、多くの教育実習を経験できる愛媛大学教育学部に入学した。

愛媛大学では多くのことを学ぶ事ができたが、その中でも特に、教育の歴史から最先端の教育まで幅広く学べたことは特に貴重な経験であったと思う。教育の歴史からは、先人達の試行錯誤や社会の変容を感じ取ることができ、先人達が積み上げてきた様々な失敗を乗り越え、現代社会により適応した人材を育てるべく変化し続ける現在の教育からは、教育の奥深さと難しさを思い知らされた。大学で学んだ現在の教育の大きな特徴は、児童が他の児童と話し合いを行い、自分の力で結論を導き出すという、教員ではなく児童が主体となって行うということである。私が小学校で受けた教育とは大きく異なっている。教員は児童の話合いがスムーズに進むような問い掛けを行うなど、司会者のような立場になっていることに大きく驚かされた。そして、私が憧れ目指していた教師像とのギャップに悩まされることになった。

愛媛大学での学びは講義だけではない。四年間を通して様々な実習に参加できる点も愛媛大学の大きな魅力だ。私も多くの学校にて勉強させていただいた。実習では、大学の講義で学んだことを実践できる他、教育現場だからこそ分かることを学ぶことができた。それは、大学での学びをそのまま実践するのではなく、児童の実態に合わせた教育を行う必要があるということだ。教育実習において、算数の授業を行ったが、道具を用いて操作を行うことで理解できる児童や、立式から理論的な部分まで理解できる児童など、授業への理解度が様々だった。そのため、最適な学びも児童によって違う。全員が一斉に同じ授業を受ける学校教育において、どこまで個に応じた指導を行うかは、教育実習中の大きな疑問になった。

私は愛媛大学を卒業後、四国中央市の松柏小学校に配属された。児童が勉強も遊びも全力で楽しめる学級にしよう、児童と早く会いたいと胸を弾ませながら四月の始業式を迎えた。私はその後、教育実習と実際の教育現場とのギャップに悩まされることになった。大学での実習とは違い、学級すべてを運営しなければならないからだ。学級活動や掲示物、週案の作成、学校行事の指導、全てが初めての経験だった。何より、社会人としての責任の重さに押しつぶされそうになっていた。しかし同僚や先輩、上司に支えられながら、なんとか学級を運営できている。それと同時に、先輩教員の授業や研修から、大学では気付けなかったことを多く学ぶことができた。私が教育現場で学んだことは二つある。

一つ目は、授業や学級運営での細かいコツである。学級担任は限られた時間の中で、児童全員の状態を把握し、的確な支援・指導を行わなければならない。宿題のチェックや机間巡視、発表を促す働き掛けなど、教育実習では気付くことのできなかった教員が裏で行っている努力を知ることができた。

二つ目は、未来を見据えて児童を指導しなければならない点だ。私はこの一年間を無事に終わらせることばかり考えていた。私が今年だけだからと思い、指導や支援を疎かにすると、来年以降、児童やクラスを担任する先生が困ってしまう。児童は来年以降も同じ学校で学び続ける。だからこそ、私たち教員は来年以降の児童のことも考えて、日々妥協することなく指導を行わなければならないと気付かされた。

これまでの私を振り返ってみると、多くの人から学び続けていることに気付かされた。学生のときは教師から学び、教師になっても、先輩や児童から学びを得ている。他者から学ぶことは、自身が教員として成長するためにできることの一つであり、学級をよりよくするための近道であると考えている。私も少しずつではあるが、課題の多い自分の学級を良くしようと奮闘している。

私のクラスには学習・生活ともに課題が多くある。児童間の学力差もあり、生活面も児童同士のトラブルが増えてきた。まだまだ勉強不足であり、学ぶべきことも多いと感じている。私は残りの半年間で、二つのことに取り組みたいと考えている。一つ目は、授業内容の理解度が低い児童への補充学習である。小学校の授業内容は、教科、学年の枠を超えてつながっている。今行っている授業が理解できないのは、以前までの授業内容でどこか躓きがあるからである。授業時間内に指導を行うことが難しいため、休み時間や放課後など、一対一で児童のペースで授業の復習や既習事項の確認などを行い、少しでも授業内容の理解の促進を図っていきたい。そして、授業や勉強が楽しいものであると感じられるようにしたい。二つ目は、児童間のトラブルの解決である。現在は、他の先生と共にトラブル解決に当たっている。私も児童の話を聞き、状況を整理することなどは行っているが、児童への指導は先輩教員に任せきりになっている。先輩教員の話の聞き方や問いかけなどを間近に観察し、自分の引き出しを増やしてきた。残り半年は自分の力で指導に当たれるよう挑戦したい。しかし、優先するべきことは、児童が安心して学校で暮らせるよう保証することである。自分で解決することに躍起になるのではなく、あくまでできる範囲のことを自分で行うよう心掛けたい。大きな問題や分からないことは、しっかりと先輩教員や管理職に相談することを忘れないよう気を付けなければならない。児童のことを第一に考えつつ、自身の成長も促していきたい。

私はまだまだ経験不足の新任の教員である。今の私にできることは、授業やクラスの指導を他クラスの観察や研修から学び、授業や学級経営の引き出しを増やすことである。先人たちの経験とノウハウを吸収し、児童が楽しめるよりよい学級を目指すことが、残り半年で私が行わなければならないことではないだろうか。児童とともに学び続ける姿勢を持ち、よりよい学級を目指して運営していきたい。

「先生」になっての自分

上島町
魚島小教諭
近藤　勇輔
（令二卒）

大学を卒業して教員になり、はや三年がたとうとしています。大学時代、地域連携実習などでたくさんの学校に行き、たくさんの児童と関わらせていただきました。その中の二校では、一年程度継続して学級に入らせていただいたこともあり、「一年間の学校の流れも分かるし、授業や学級づくりも大丈夫だ。」と安心し、意気揚々と四月を迎えました。

しかし、実際に始まってみると、思いもよらないようなたくさんの仕事が重なり、とても忙しかったです。そして、「自分は何もできないんだ。」と、実力のなさを痛感しました。今でも、十分な戦力となっているとは言いがたいですが、初任者の四月の段階を卵に例えるならば、今は、そこに一生懸命ひびを入れている状態ではないかと思います。そのような、あっという間に過ぎた三年間を振り返りたいと思います。

教員生活一年目。各学年三、四クラスある大規模の学校に赴任しました。自宅から近く、自分が小学校の時にお世話になった先生もおられ、初めて担任をする子どもたちに会えるのを楽しみにしていました。しかし、新学期が始まると、忙しさが想像を超えていました。子どもたちの宿題の丸付けや様々なプリントの印刷、電話対応、行事の準備、生徒指導、新型コロナウイルス感染症対策……。時計を見ると、夜の八時。その上、学校で授業準備をすることができず、家で板書計画を立て、発問を考えながら、そのまま夢の中へ……。気付いた時には、朝の四時。また、授業準備の続きをして、ご飯を食べて歯磨きをして学校へ……。そんな毎日が続きました。とてもしんどい毎日でした。

しかし、そんな中でも自分を元気づけてくれたのは自分のクラス、四年三組のクラスの子ども三十四人と同僚の先生方でした。子どもたちとは、始業式で初めて出会いました。とても緊張しながら、教室に行き、学級開きをしました。「一年間頑張って欲しいこと」や「こんなクラスにしたい」という話をしたところ、子どもたちは真剣な表情で聞いていて、ほっとしたことを覚えています。

しかし、静かだったのは、最初だけでした。休み時間になると元気よく、「先生！」と話し掛けてくれました。何人もが同時に話してくることも多く、大変でしたが、初任者である私にとって、子どもから話に来てくれるのはうれしかったです。友達に迷惑を掛けたり、けんかをしたりして、指導することも多かったですが、授業は明るく賑やかでした。昼休みには、クラス遊びをし、度々トラブルも起こりましたが、それも含め楽しかったです。研究授業や参観日のときには、子どもたちから「先生、絶対緊張しとったやろ。いつもと違う声やったよ。」と言われることもあり、「まだまだだなあ。」と思っていました。

また、同僚の先生方は、何もできない自分にアドバイスをくださったり、ご飯に誘ってくださったり、たくさん話を聞いてくださったりしました。指導案を作るために、学年部の先生が夜遅くまで残ってくださったのは、本当にありがたく、今でもとても感謝しています。さらに、初任者指導の先生にも、とてもお世話になりました。教師としての心構えを教えてくださるだけでなく、授業中は、子どもの近くに行き、御指導してくださり、昼休みには一緒に外で遊んでくださいました。私のクラスの児童もとても懐いており、二月のお別れの時には数人の子どもが泣いていました。

そして、あっという間の一年が終わって次の四月になり、教員生活二年目が始まりました。昨年度のたくさんの失敗・反省を生かす新たな気持ちでのスタートです。持ち上がりで五年生を受け持つことになりました。昨年度、他のクラスで授業をさせてもらったこともあったため、始業式の日には、顔と名前が全員一致しました。そして、昨年度受け持った児童もいたため、一年前に比べると、非常にスムーズに学級開きができました。自分を分かってくれている子どもたちがいるのは心強く、授業や指導がとてもやりやすかったです。しかし、持ち上がったことでのマンネリ化があり、「慣れ」というのも教員にとっては怖いものなのだと学ぶことができました。

二年目で心に残っていることは自然の家です。子どもたちにとっても初めての集団宿泊研修であったので、自分も頑張ろうという気持ちはあったのですが、何をすればいいのか全く分からず、右往左往していました。その時に助けてくださったのも、同僚の先生方です。

私は、キャンプファイヤーとオリエンテーリングの係でした。オリエンテーリングは、学年部の先生に尋ねたり、これまでの資料を見たりしてきちんと準備できたのですが、キャンプファイヤーは木を組んでくださったり、ゲームを作ったりという具体的な内容が分からず不安でした。しかし、先生方がそんな自分を見て、間髪を入れずフォローしてくださいました。おかげで、成功させることができました。二泊三日の自然の家で子どもたちの成長を感じるとともに、自分も大きく成長することができたのではないかと思います。

二年間、同じ子どもたちを見ていたため、身長など外見での成長はもちろんのこと、内面の成長もたくさん見られました。「よし、このまま三年目に突入して、この子たちを卒業させ、笑顔で見送りたいな。」という気持ちにもなっていました。しかし、二年で異動となり、新天地で頑張ることになりました。

三年目の現在は、へき地四級、児童数一名の学校にいます。中学校が併設されていて生徒三名、計四名の小規模校です。今治から通えないため、二年ぶりの一人暮らしです。これまでの二年間とは学校規模や児童数・生活環境などが大きく違うため、戸惑うこともあり、慣れないこともたくさんあります。しかし、「へき地教育は教育の原点」という言葉を実体験の中で学ぶことができています。

また、本校は総合的な学習の時間や行事などを、小・中合同で行います。私自身も中学校と兼務しているため、中学生と関わることも多いです。中学生と接して、「考え方や能力などが小学生とは全然違う」、ということが分かりました。児童がこのような立派な姿に成長できるように指導していく必要があると気付くきっかけになりました。

三年間の教員生活を振り返ってみると、改めて子どもたちや先生方に助けてもらっているなあと思います。学生時代も含め、今まで私に関わってくださった子どもたち、先生方に感謝をしたいです。この夏に、初任者から二年間担任した児童から、手紙と写真が届きました。手紙には、今年も頑張っているという報告があり、写真は離任式の日に撮ったものでした。それを見たとき、昨年のクラスを懐かしむと同時に、教え子たちも頑張っているんだから、もっと自分も頑張りたいという意欲が湧いてきました。これからもたくさんの子どもたちや先生方と関わり、助けてもらいながら、卵の殻を破り、一人前の成鳥になれるよう、努力し続けます。

三年間で、大規模と小規模の両方を経験できた濃い三年間でした。これらの経験を生かし、「近藤先生に出会えて良かった。」と思ってもらえるような教員を目指します。

憧れの教師になって

東温市
南吉井小教諭
小堤　美羽
（令四卒）

私は小学生の頃から学校大好きっ子でした。授業はもちろん、先生、友達、行事が好きで、毎日学校に行くことが楽しみでした。小学校の先生を目指したのも、このときの楽しい思い出があり、自身もあのときの先生方のように、子どもたちが楽しいと感じられるような学級を作っていきたいと思ったからです。その思いは中学校や高校を卒業しても変わらず、愛媛の教員になることを目指して愛媛大学教育学部の初等教育コース小学校サブコースに入学しました。大学では授業に加え、愛媛大学附属小学校や小野小学校などでの実習を通して、専門的知識を学びました。たくさんのことを大学四年間で学ぶことができましたが、中でも愛媛大学附属小学校での実習でお世話になった学級の担任の先生の言葉が心に残っています。それは、「どの子どもも、平等に特別扱いをする」という言葉です。子どもたちに平等に接しなければならない、ひいきしてはならないという考えを持っていた私にとって、大きく考えが変わった言葉でした。さらにこの実習では、「実習の先生を本物の先生にしよう大作戦」というものが学級で行われていました。実習の最後の日に、このことを伝えられたのですが、小学校の楽しさを伝えることで小学校の先生に絶対になってもらおうと、担任の先生と子どもたちが話して一か月間活動に取り組んでいたそうです。担任の先生に、この作戦を成功させるには私たちが小学校の先生になるしかないと伝えられ、子どもたちに胸を張って「小学校の先生になったよ」と伝えられるようにこれからもっと大学の学びや試験勉強を頑張ろうと強く思いました。

実習の後は、絶対に小学校教員になるぞ、という思いを胸に教員採用試験の対策に励みました。同じ目標を持つ仲間と切磋琢磨して、面接練習や小論文練習に取り組みました。意見交換をしながら一緒に対策に取り組むことで、自分が持っていなかった知識や考えを得ることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

教員採用試験当日は緊張しましたが、落ち着いて、今まで学んだことを出し切ることができました。そして、教員採用試験に無事合格することができました。

実習でお世話になった担任の先生に、教員採用試験に合格したことを伝えると、たくさんの言葉をいただきました。まず、初任者として学校に赴任するに当たり、たくさんの先生方や子どもたち、保護者の方に迷惑を掛けることを自覚することです。初めてのことばかりで、あらゆる面で力不足だからこそ、自分にできることを見つけて全力で取り組むことが大切であると教えてもらいました。また、たくさん質問したり、教えてもらったりして、様々な知識や技術を学ぶ姿勢が大切であることも教えてもらいました。これらのことを初任者としての一年間、さらにその先の教員生活でも大切にしていきたいと思っています。

そして三月には赴任校が決まり、母校である南吉井小学校と知ったときはとてもうれしかったです。職員室には、私が小・中学生のときにお世話になった先生方がたくさんいらっしゃって、校舎の様子も変わっておらず、とてもうれしく、懐かしくなりました。

教員生活一年目のどきどきした新鮮さと、小学校に戻ってきた懐かしさの半々の気持ちで、いざ教員生活が始まってみると、先生方の日々の支援の大変さがよく分かりました。小学校六年間を楽しく過ごすことができたのは、常に私たちに寄り添い、温かく支援してくださっていた先生方のおかげだと、当時の先生方への感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、教員一年目として働いている現在も、たくさんの先生方がいろいろなことを教えてくださります。とても明るくて温かい職場で、この南吉井小学校に赴任でき、恵まれているなと感じています。また、先生方だけではなく、子どもたち、保護者の方、地域の方も温かくて、毎日が楽しく、充実しています。小学校での様々な人との出会い、つながりにこれからも感謝し、大切にしていきたいです。

初任者研修では、松山市以外の小・中学校の初任者が集まって、学級の様子を伝え合ったり、一緒に講話を受けて意見交換をしたりして、切磋琢磨しながら互いに学び合っています。初任者研修での講話で特に心に残っている言葉があります。それは、「焦らず。怠けず。丁寧に。」という言葉です。初任者として、初めて担任を持ち、授業をしたり、指導をしたり、校務をしたりと初めてのことだらけで、うまくできないことがたくさんあります。しかし、焦ってもいいことはないと前向きに考えることを意識しながら、怠けることなく、自分にできることに力を入れて取り組んでいきたいです。そして、自分に与えられた仕事を丁寧にこなし、子どもたちの力やよいところを伸ばせるよう、職務に当たっていきたいと思います。この言葉は初任者の今はもちろん、これからの教員生活でずっと大切にしていきたい言葉です。

また、初任者指導の先生にも三年梅組の子どもたちは楽しそうに授業を受けていると褒めてもらいました。子どもたちのキラキラした表情を授業中に見ることができると、授業を頑張って考えてよかった、もっと頑張ろうと思います。何より、私自身が授業をすることがとても楽しいです。担任をしている三年梅組は、とても活気にあふれ、元気いっぱいなクラスです。いつもまっすぐで、どんな活動にも楽しみながら全力で取り組んでいます。私はこのクラスの子どもたちから学ぶことが多く、毎日新鮮な気持ちで過ごすことができています。

ある日、私が子どもたちに、毎日の学校生活の中で成長していることや頑張っていることを伝えたことがありました。すると、ある子どもが「先生がすごく頑張っているから頑張ろうと思えるんだよ」と言ってくれました。それを聞いて、うれしい気持ちになると同時に、これからもっと頑張ろうと思いました。

私は子どもたちに、「一緒に頑張ろう」とよく伝えています。私は、教師の仕事のやりがいとして、「子どもと一緒に成長できること」や「子どもの成功や成長を一緒に喜べること」があると考えています。子どもと一緒になって活動に取り組み、子どもが失敗したときは一緒に解決策を考え、成功したときや成長を感じたときは自分事のように一緒に喜ぶことは、子どもたちと毎日学校で一緒に過ごす教員だからこそできることだと思います。悩むときやつらいときもたくさんありますが、これらの素敵なことが味わえる教員生活を、まず私が全力で楽しみたいと考えます。毎日の授業も、子どもたちとの触れ合いも、保護者の方や先生方との会話も、たくさんの初めてのことを一つ一つ楽しみながら生活していきたいです。そして、小学校の頃の私のように、子どもたちが学校が楽しいと思えるような授業や学級経営の実現に向けて、これからも努めていきたいです。

教員生活を振り返って

八幡浜市
松柏中教諭
梶田　竜介
（令二卒）

私は、令和二年三月に教育学部を卒業し、大洲北中学校で一年間講師として勤務した後、八幡浜市立松柏中学校に赴任した。現在二年目を迎えている。この三年間の教員生活の中で、私が体験したこと、心に残ったことを書きたいと思う。

一　理科の授業にて

松柏中学校で、情報教育主任を任されることになった。学生時代からＩＣＴ機器を活用することが好きだった私は、まず自分の理科の授業で、どんな使い方ができるのかを考えた。そして、実際に活用して授業を行ってみた。

課題の配付や提出を、ロイロノートというソフトを活用して行った。ロイロノートは、文字や写真を掲載した「カード」を端末上で作ることができるので、プリント代わりに生徒に配付したり、生徒が編集したものを課題として提出させたりできるソフトである。

一年生の生物分野の授業では、グラウンドや花壇で見つけた生き物を端末のカメラで撮影し、互いに紹介しあうようにした。生物に興味関心の深い生徒たちが、嬉々としてダンゴムシやナメクジなどを撮影した。そのダイナミックな写真には、とても感心させられた。生物への関心が薄い生徒も、友達が撮影した写真を食い入るように見つめていた。ある生徒などは、藤棚の中にひっそり作られていた小鳥の巣を発見し、それを撮影した。その写真を見た友達は大きな歓声を上げていた。

この他に、スケッチや実験の考察を生徒に提出させることもした。ふだんは挙手発表をすることのない生徒の意見を知ることができた。それらの提出物には、コメントを加えて返却することができる。端末を上手に利用することで、生徒との心の距離を縮めることができた。

一方で、効果的にＩＣＴ機器を利用するためには、かなりの勉強と準備が必要である。「カード」を作ろうとすると、思った以上に時間がかかる。ロイロノートを考えたとおりに動かすには、使い始めて数ヶ月、いや、もっと時間が必要である。

それでも生徒の飲み込みは早い。コツをつかんだ生徒が他の生徒に教え、徐々にリテラシーが向上していく。時には、私の知らないテクニックを披露してくれる生徒もいる。字がきれいに書けたり、ピアノが上手く弾けたり、人と話すのが得意な生徒がいるように、ＩＣＴ機器の操作で能力を発揮する生徒がいると感じた。生徒の活躍の場が増えることは、すばらしいことだと思う。

一方で、生徒のＩＣＴ機器の活用には課題も多いと感じている。指導方法を間違えると、端末機器は生徒にとって格好の遊び道具に変身することもある。理科の授業で、共有機能を使って、端末上のホワイトボードに自由に意見を書かせたことがあった。一瞬にして、巨大な落書き帳ができあがった。何とも言えない悲しみが込み上げてきた。

端末を活用することで、自分の能力を伸ばしたり、可能性を広げたりすることを生徒が理解すれば、きっと自己表現や創作活動を助けてくれるに違いない。私はそう考えて、ＩＣＴ機器を活用するように心掛けている。

二　学級担任として経験したこと

学級担任をしていると、生徒が豊かな感性を持っていると感じることがしばしばある。

松柏中学校に赴任して一年目、私は自分に与えられた仕事をやり遂げることに毎日必死になっていた。学級担任として教室の掲示物を準備したり、生徒の書く日記に返事を書いたりした。理科の教科担任として、教材を作ったり、実験の準備をしたりもした。また、野球部の顧問をしていると、あっという間に夜が更けていった。先輩の先生の技を学び、スキルアップしようと考えていたが、実際は日々の仕事に追われる毎日を送っていた。

学級担任をしていると、私が生徒に注文をすることがよくある。「提出物は遅れないようにしなさい。」とか「机の中はきれいにしておきなさい。」とか「生活のリズムをきちんと整えなさい。」とか……。どれも自分ができていない内容の注文ばかりである。果たして私の言葉は生徒に届くのだろうか。

案の定、生徒の心には届かない。生徒は豊かな感性で、私という人間を見て、感じ取っているのだと思った。ふだんの生活がきちんとできていない私の言葉には、真実味がなかったのだろう。生徒たちの学校生活には、何の変化もなかった。

ちょうど同じ時期に、職場の先輩から「あるべきものを、あるべき場所へ」というアドバイスを受けた。乱雑な私の机上を見かねて助言されたのだろう。私はそのアドバイスに従い、（実際にできているかどうかは別にして）身の回りの整理整頓を心掛けるようになった。

また、別の先輩には本を勧められた。「生徒に響くいい話」がまとめられた本だった。自分の知らない世界が本の中にあった。その本から生徒に「確かにそうだな。」と思わせることが大切だと学んだ私は、話し方や話すスピード、気持ちの込め方などに注意しながら、学級で話をするように努めた。時には、先輩の先生の学級での話し方を見学させてもらったりもした。

ふだんの学校生活において、生徒の気持ちに共感することを心掛けた。生徒がよくない行動をした場合には、何故よくないのかをゆっくりと説明することにした。そうやって、月日が流れすぎ、二学期も終わりを迎えようとしていたある日のことだった。

個人懇談で、ある生徒の母親が次のように話された。

「うちの子が、梶田先生の言うことは納得がいくって言っていました。丁寧な御指導をありがとうございます。」

この言葉を聞いた時、私の心を縛り付けていたものから解き放たれ、開放感のようなものを感じた。思わず涙が出そうになったが、個人懇談で涙を見せるわけにはいかないから必死にこらえていた。

現在も、相変わらず、忙しい毎日を過ごしている私であるが、生徒が私の言動を敏感に受け止めていることを念頭に置いて、まず自分の生活リズムを整えることから始めたいと考えている。

社会人として三年目が終わろうとしている。この間、大学で学んだことを基礎にして、学校現場で様々な体験をして、一歩一歩前進していると感じている。これからもたくさんの体験を通して学び続け、自分を成長させていくことができたらと願っている。

教師になって

宇和島市
吉田中教諭
山口　萌
（令三卒）

私は、今年度の春から新規採用教員として宇和島市立吉田中学校で働いています。赴任して半年以上がたちましたが、教師という仕事の難しさとともに、やりがいを感じています。半年間を振り返り、所感をまとめてみました。

四月一日、緊張しながら赴任校に行くと、二年生の学級担任を受け持つことが分かりました。初任者の私が、担任として生徒たちをまとめていけるのか自信がなく、不安でいっぱいでした。さらに、私を待っていたのは、水泳部の顧問という現実でした。水泳の経験は全くなく、まさか自分が水泳部の顧問をすることなど、考えもしていませんでした。また、一年生と二年生の理科の授業を担当することになりました。

始業式が始まるまでの数日間は、どのような生徒がクラスにいるのか楽しみな反面、緊張しながら学級の準備を行いました。ロッカーに名前を貼る、提出物の整理を行うなど、今まで当たり前にしてもらっていたことを考えると、改めてありがたさを感じました。

学級開きが終わって、学校生活が始まりました。仕事に慣れるまで、毎日がとても大変でした。まず、日々の出席簿の記入や、出席黒板の記入など、事務的な仕事に慣れることが大変でした。分からないことがあったときには、周りの先生が優しく教えてくださり、間違っていたら厳しくも的確な指導をしてくださいました。そのおかげで今では確実に行えるようになりました。他の仕事に対しても、先生方からの厳しい指導、それと同時にいただいた励ましの声を支えに、心が折れそうになったこともありますが、少しずつ様々な仕事ができるようになってきました。

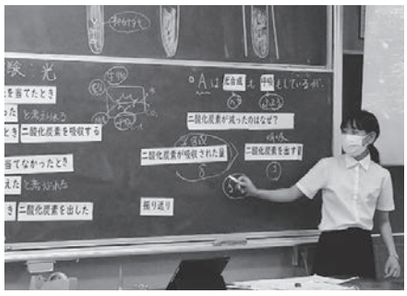
しかし、授業や指導を行う上で、思っていたよりもうまくいかないこともあり、難しさを感じています。今は特に、生徒との距離が課題だと感じています。朝の会などで、生徒への話し方や伝え方を工夫したり、休み時間に積極的に話し掛けたり、空いている時間に生徒とのコミュニケーションを図ったり、日記に丁寧に返事を書いたりしています。私と生徒との距離が少しでも縮まるように、根気強く取り組んでいきたいです。

他にも勉強しなければならないことが多くあり、指導していただくことがあります。例えば、電話対応や授業について、改善点が多いと感じています。電話対応は、先輩の先生が電話対応をしている様子を聞いて勉強しています。授業については、発問や指示の仕方に改善すべき点があります。最近、ガラスを通る光の進み方について考える授業を行いました。実験の予想を考えさせるときに、私は、漠然と「ガラスの中の光の進み方を予想しましょう」、とだけ言いました。子どもたちはどのような状況を想定して予想を考えたらいいのか、具体的な状況が分からないので考えづらかった、ということがありました。また、生徒の反応がよかったと思ったときでも、もう少し別の表現をしたらよかったかもしれない、別の教え方をしたらどうなんだろう、と考えることが必ずあります。他の先生から指導していただいたことや、自分自身の改善点を振り返り、よりよい授業が行えるようにしていきたいです。そして、少しでも分かりやすく伝えられるようにしていきたいです。授業が空いている時間には、他の先生方の授業を見に行って、勉強させていただいています。理科の授業はもちろんですが、多くの先生方に学ばせていただいた、生徒との関わり方、指導の仕方、授業の進め方など、少しでも自分の授業力や指導力向上に生かせられるよう努力したいです。

忙しい毎日ですが、先生になってよかったと思うことがあります。それは、生徒の成長を見ることができたときです。授業後、理科が苦手な生徒が、初めて、「先生今日の授業面白かった」と言ってくれたり、「分かった！」とうれしそうな顔をしたりする姿を見たとき、とても感動しました。また、部活動でも、生徒の成長を感じることができます。顧問として引き受けたときは、めりはりのない練習が続いていました。このままでいいのか不安になり、ある先生に相談しました。いただいたアドバイスを基に、水泳部の練習について、部員と話し合う機会を設けました。時間を掛けて部活動に対する考えを話し合い、練習量などを個人で見直したことで、全員が一生懸命練習に取り組むようになりました。生徒と真剣に向き合い、考えをしっかり話し合うと、生徒は応えてくれるのだなと感じました。他にも、教室に入ったときに、生徒から「おはようございます！」と元気な挨拶の声が聞こえたとき、今日も一日頑張ろうという気持ちになります。生徒から相談を受けたとき、責任を感じる一方で、頼りにしてくれているのだと感じます。出張から帰って、生徒が「先生お帰りなさい」と声を掛けてくれたとき、毎日必ず話に来る生徒ができたとき、本当に教師をしていてよかったなと感じます。

私は、生徒の成長を支えられる教師になりたいです。そのためにも、毎日の授業や生徒との関わりを大切にしていきたいと思っています。勉強が苦手な生徒も、得意な生徒も、理科の面白さ、楽しさを感じられるような授業を毎時間するのが理想です。しかし、実際には、生徒の反応が今一つで予想外のことがあったり、思っていたよりも伝わっていなかったりして、失敗してしまうこともあります。失敗を生かし、これまで以上に教材研究を行い、他の先生の授業を見て学び、授業力を向上させたいです。また、生徒との関わりを大切にすることで、全ての生徒が学校に来てよかったと思えるようにしていきたいです。生徒のささいな変化を見逃さず、すぐに気付ける教師になりたいです。

最後に、私は教師になって、仕事が大変で、自分の不甲斐なさを感じることがたくさんありました。心が折れそうなときもありましたが、そんなとき、大学時代の友人、家族、上司や同僚の先生など、たくさんの人に支えていただいていることに気が付きました。いつも、さりげないところで支えてくださっている周りの方々に感謝しながら、これからも周りの全ての人を大切にしていきたいです。毎日大変ですが、教師の仕事は楽しいです。子どもたちのために、これからも頑張っていきたいです。



教員生活を振り返って

愛南町
福浦小学校長
片山　新也
（平元卒）

教員となって三十四年が終わろうとしている。薄れいく新採当時の記憶を呼び戻しながら、これまでの教員生活を振り返ってみたい。

『二十代の私』

大学生気分が抜けないまま、松山市から旧西海町に赴任した私は、自然豊かな環境に感動を覚えた。美しい海に広がるタイやハマチの養殖場。道路に何気なく出てくる野生のアナグマやサルたち。不安よりも新たな環境の中で、休日ごとに郡内をドライブする楽しい日々。しかし、大変だったのは食生活だった。学生時代からあまり自炊をしなかった私は、毎晩の食事に困っていた。一歩外に出れば店があり、何でも買える松山市と違って、当時はコンビニの一軒もない町だったからだ。夕方に仕事を中断し、隣町まで弁当を買いに出て、学校で食事をしながらだらだらと遅くまで残っていたように思う。だからと言って仕事が計画的に終わるでもなく、見通しが持てない仕事の連続で、校長先生や初任者指導の先生によく注意されたものだった。今の若い先生方は、真面目で本当に仕事ができるなあと感心している。

では、二十代の私が頑張ったことは何なのか。考えてみると二つ思い出すことがあった。

一つ目は、休日に校区の子どもたちと遊んだことだ。海や山に出掛けて自然と戯れたり、公園で遊具遊びをしたり、ファミコンでゲームを楽しんだり。学校でも家でも、子どもと触れ合う時間があった。

二つ目は、学級ＰＴＡ活動で子どもたちに体験活動を行ったことだ。例えば、隣町のキャンプ場で寝泊まりし、キャンプファイヤーをした。海辺で育った子どもたちにとって、冷たい川で泳いだり、友達とテントの中で夜を過ごしたりする体験は格別なものであったと思う。キャンプファイヤーでは、大学時代に所属していた児童文化研究会で学んだハイスカズンバとブラボーサンバの踊り、酋長と手下のパフォーマンスを保護者と一緒に披露した。他のキャンプ客が興味津々で集まり、大勢のギャラリーになったことを覚えている。

その他にも、バスを貸し切り、朝四時出発で大分県の由布岳登山をしたことがあった。バスガイドさんから、「何が楽しくて四国からわざわざ朝早く来られたのか。」と。「大分県では小学四年生の遠足コースですよ。」と、軽く馬鹿にされ、保護者とともに恥ずかしい思いをした経験もあった。あれから三十年近くたった今、当時の保護者に会った時、「先生のおかげで、親子そろって山に登るという貴重な経験ができました。」という喜びの言葉をいただき、嬉しくなった。しかしながら、どの活動も保護者の理解と協力なしでは実現できなかったことである。保護者には感謝の気持ちでいっぱいである。

『三十代の私』

三十代の私は、社会体育を頑張った記憶が強い。二校目に赴任した学校では、ミニバスケットボールが盛んであり、全国大会にも出場した強豪校であった。伝説の指導者の教えと県内どこへでも引率してくださる保護者に支えられ、土・日もなく練習と試合に明け暮れた。しかし、知識も指導力もない私は、子どもたちに満足のいく結果を与えることができず、しばらく指導者を退き、帯同審判のみ行う年が続いた。チームの人数不足が顕著になり、いよいよ翌年にはチームを解散しなければならないというタイミングで、再び指導者となる機会をいただいた。相変わらず知識も指導力もなかったが、専門書を購読し、暇さえあれば戦術を考えた。これらが幸いしたのか、南予地区で予選に勝って二週目に残る経験も味わうことができた。

三校目に赴任した学校では、体育主任を任されたこともあり、ソフトボールと相撲などを担当した。ソフトボールでは、地元の実力者で指導力の高い監督のもと、私はコーチとして子どもたちと汗を流した。監督や保護者のバックアップのおかげで、愛南町として町村合併してからもしばらく、チームは優勝し続けた。そのとき、監督さんから厳しい忠告を受けたことがあった。「コーチは、監督が注意したあとはフォローするもの。一緒になって注意すると、子どもたちが自信を失ってしまう。」当たり前のことであるのに、感情的になりやすい私は監督の支えになることができず、子どもたちに頼られる存在から遠くかけ離れた存在となってしまった。逆に、相撲では、遊び心いっぱいで指導したので、子どもたちは私の練習メニューに真剣についてきたように思う。心にゆとりを持ち、焦らずに指導することが大切であると学んだ。

『四十代の私』

四十代の私は、教員になって初めて中規模校に赴任した。そこで担当した生徒指導主事として、保護者との様々なトラブルに遭うことになる。学級担任として子どもたちの不安をしっかりと受け止めることができなかったため、他学年の問題はおろか、自学級の問題でさえ解決できにくい状況となった。その時に学んだことは、「事実だけを指導し、推測を交えないこと」「白黒はっきりさせず、グレーで終わらせることもあっていいこと」「心にゆとりを持つために自分一人で抱え込まないこと」を学んだ。

もう一つの初めてで、特別支援学級の担任をした。障がい種別では、自閉症・情緒障がい特別支援学級であった。一年目は二人、翌年からは三人を担当した。前年度にグレーゾーンである子どもが数人いる四十人を受け持ったので、余裕で指導できるだろうと安堵していた。しかし、その考えは大間違いであった。言葉の少ない子どもが半年間席に座ることができず、音楽準備室や学級園を走り回って、挙句の果てには隣の家の犬小屋で寝ていたこともあり、残った子どもの授業をどうすればよいか、何をすれば担任の指示が通るのか毎日悩む日々が続いた。それからは、時間とともに悩みは解決していった。そして、卒業式の日。私が名前を呼ぶと、その子は返事をした後、座席から卒業証書を受け取る檀上まで、私がセットした足型に沿って一人で歩き、保護者と来賓に礼をして着席した。五年まで一度も参加できなかった卒業式に参加しただけでなく、卒業生最後の証書授与まで一人で行動できた感動は、今でも私の脳裏に焼きついて離れない。

『五十代の私』

そして、五十代の私は今、校長室に座っている。あの頃と何も変わらず無知のまま、ただ歳だけ重ねてきた。ただ幸せなことに、二十代から三十代の九年間過ごした学校の校長室に座っている。あの頃の失敗を消すことはできないけれど、教え子の子どもたちに世代を超えて恩返しをすることはできる。退職の日まで、自分にできる今の精一杯を尽くしていきたい。

学部トピックス

◆愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が二つのコンクールで全国大会出場を果たしました【八月二十八日(日)、九月四日(日)】

愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が、令和四年八月二十八日(日)開催の第八十九回NHK全国学校音楽コンクール四国ブロックコンクールにおいて金賞を受賞し、令和四年十月十日(月)に東京のNHKホールで開催される全国大会の出場権を十六年ぶりに獲得しました。また、令和四年九月四日(日)開催の第七十五回全日本合唱コンクール（JCA）四国支部大会においても金賞を受賞し、令和四年十月三十日(日)に青森市のリンクステーションホールで開催される全国大会の出場権を獲得しました。

二十二年ぶりの全国大会ダブル出場という偉業を果たしたコーラス部は、現在、臨時部員を含む二十六人。これまで、歌声、ピアノ及び指揮が三位一体となった合唱を披露できるよう、日々練習に励んできました。

金賞　賞状
愛媛大学教育学部附属中学校
あなたの学校は第八十九回
NHK全国学校音楽コンクール
四国ブロックコンクールにおいて優秀な
結果頭書の成績をおさめられました
ここにその栄誉をたたえ賞状を贈ります
令和四年　八月二十日
日本放送協会
会長　前田晃伸
全日本音楽教育研究会
会長　福井義敬

第 89 回ＮＨＫ全国学校音楽コンクール四国ブロックコンクール

金賞　賞状
愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部
四国支部代表
あなたがたは第七十五回全日本
合唱コンクール四国支部大会
中学校部門混声合唱の部に
おいて優秀な成績を収められ
ましたことにその栄誉をたたえ
表彰致します
令和四年九月四日
全日本合唱連盟四国支部
朝日新聞社

第 75 回全日本合唱コンクール（ＪＣＡ）四国支部大会

◆愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が第七十五回全日本合唱コンクール全国大会で銀賞を受賞しました【十月三十日(日)】

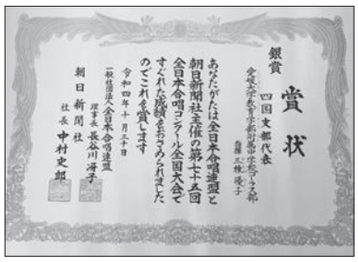
愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が、令和四年十月三十日(日)に青森市リンクステーションホールで開催された「第七十五回全日本合唱コンクール全国大会」（一般社団法人全日本合唱連盟、株式会社朝日新聞社主催）の中学校部門混声合唱の部で銀賞を受賞しました。

この大会は、合唱技術の向上及び合唱音楽の普及を目的として昭和二十三年から毎年開催されており、コーラス部は、第六十五回大会以来十年ぶりとなる全国大会出場を果たし、左記二曲を熱唱しました。

・混声合唱曲集「トンボとそら」から『3．ゆび』

・及び混声合唱曲集「女性詩人による三つの譚歌」から『春』

部員たちは、コロナ禍や中学校校舎の改修工事など、練習時間や場所の確保等に様々な制約を受けながら、ひたむきに練習に励んできました。その結果、日々の練習の集大成と言える合唱を披露することができました。


銀賞　賞状
愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部
四国支部代表
あなたがたは全日本合唱連盟と
朝日新聞社主催の第七十五回
全日本合唱コンクール全国大会で
すぐれた成績をおさめられました
のでこれを賞します
令和四年十月三十日
一般社団法人全日本合唱連盟
理事長　長谷川清子
朝日新聞社
社長　中村史郎

◆愛媛大学教育学部附属学校園（持田地区）で合同避難訓練を実施しました【十月二十六日㈬】

令和四年十月二十六日㈬、持田地区四校園（教育学部附属幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校）で、松山市消防局東消防署のご協力のもと、地震発生を想定した合同避難訓練を実施しました。

この訓練は、例年「附属学校園における災害時の連携協力関係の充実強化、災害応急対策の確立及び防災意識と防災行動能力の向上」を目的に実施しており、今年度も、附属学校園の子どもたちと教職員が一丸となって真剣に取り組みました。

午前十一時〇分、地震発生を知らせる放送が各校園に流れると、子どもたちは安全確保行動を取り、教員に誘導されて一斉にグラウンドに避難しました。その後、全員の安全を確認し、東消防署員による講評が行われました。

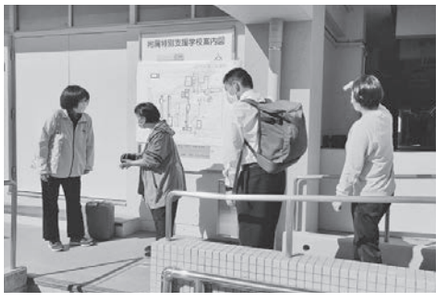
続いて、附属中学校の三年生が園児たちを屋内避難場所（章光堂）まで引率・誘導する二次対応訓練が行われ、不安そうな様子の園児たちに生徒は親身になって寄り添い、しっかりサポートしながら避難していました。

その他、附属幼稚園と特別支援学校では、子どもたちの保護者への引渡しの訓練なども行われました。

附属学校園では、今後も防災面における各校園間の相互連携を深めてまいります。

避難の様子（附属幼稚園）

避難の様子（附属小学校）


保護者引き渡しの様子（特別支援学校）

中学生が園児を引率・誘導する様子

◆愛媛大学附属高校のプラガールズが国連の国際会議で発表しました【七月二十一日㈭】

令和四年七月二十一日㈭、東京の国連大学で開催された国際連合主催「第三回パリ協定とSDGsのシナジー強化に関する国際会議」内のサイドイベント「気候変動対策及び持続可能な社会の構築に関する地域の行動を加速する多様なステークホルダー間連携の役割」に附属高校のプラガールズが招待され、「マイクロプラスチック解消の挑戦」と題した発表を行いました。

このプログラムは、オンライン参加を含め世界から国連大学の副学長や国連の担当首席、米国の郡議会議員など七人のパネリストによるもので、プラガールズもその一人として招待されました。発表は英語で同時通訳され、その後の質疑にも答えました。プラガールズは研究内容に加え、外部連携による相乗効果とその成果が国連大学から高い評価を受けており、今回の招待につながりました。

翌二十二日㈮は国連大学で開催された「第七回全国ユース環境活動発表大会」のフォローアップ研修に参加しました。プラガールズはこの大会で「国連大学サステイナビリティ高等研究所 所長賞」を受賞しています。今回招待された全国の他の三つの高校とともに各校の研究発表やグループワークで交流を深め、国連大学の外国人大学院生や環境省のSDGs担当の方とも意見交換をすることができ、貴重な体験になりました。

プラガールズは引き続き、マイクロプラスチック解消の一助となるよう研究を進めていきます。

フォローアップ研修グループワーク

国際会議場で発表の様子

国際会議場前

◇教育学部生の思い

大学生活を振り返って

初等教育コース小学校サブコース
阿部　眞子

私のふるさとは愛媛県の最西端にある伊方町です。実家がみかん農家をしているということもあり、幼い頃から地元伊方町の自然に囲まれて伸び伸びと育ちました。二〇一九年の四月、苦しい受験期を乗り越え、愛媛大学教育学部に入学。大きな期待や楽しみな気持ちを抱いてスタートした大学生活でしたが、周りにはご両親が教員をされているという学生が多く「小さい頃から教員として働く両親の姿を見てきた」「教育について両親と語り合い、学校現場について教えてもらった」など、教育学部の仲間たちの体験談を聞けば聞くほど、育ってきた環境の違い、教育に関する基礎知識や体験量の違いに圧倒され、当初は大きな焦りを感じていました。しかし、諦めずに「学びのチャンスは自分の力で切り開く！」という強い意志のもと、この四年間は授業と課外活動の両方において貪欲に学び続けました。

授業においては、「単位を取れたらいい」と思うのではなく、「何を学ぶか」「どのような態度で取り組むか」ということを意識して受講しました。また、愛媛大学では複数免許が推奨されているため、主免許の小学校教諭の免許に加えて、中学校理科の一種免許、中学校国語の二種免許、図書館司書教諭の免許など多くの免許を取得することにも取り組みました。取得を目指す免許数が増えれば増えるほど、受講しなければならない授業数も増えて負担は大きかったですが、授業日や課題の締切日などを見落とさないようにスケジュール管理に力を入れ、自己管理能力も高まったと思います。授業への取り組みの成果が実り、四回生の九月末に愛媛大学成績優秀者として表彰していただけました。頑張ってきたことを評価していただき、次のステップに向けた意欲も高まったように感じます。

課外活動においては、これまで地元伊方町の亀ヶ池温泉復興プロジェクトや、うわじま∞あいだいプロジェクトなど、地域創生型の活動に積極的に参加し、子どもたちと共に地域活性化に取り組んできました。プロジェクトを通して多くの子どもたちとの関わる中で、子どもだからこそ気づける地域の課題があること、そして子どもにはその課題を解決するための能力や意欲があることに改めて気づき、子どもたちの持つ可能性に大きな期待を抱くようになりました。現在、私のふるさと伊方町をはじめ、愛媛県内の多くの市町村で人口減少、少子高齢化が進んでおり、地域の活気がなくなってきているのが現状です。教職に就いた後は、小学生の柔軟な思考と意欲を活かして地域を盛り上げ、地域を愛する子どもの育成に取り組んでいきたいと考えています。

最後に、私がこれまで充実した環境で多くのことを学べたのは、温かくご指導してくださった愛媛大学の先生方、二十一年間たくさんの愛情を注いで育ててくれた両親、切磋琢磨し合い共に楽しい時間を過ごした友人たち、プロジェクトで関わった地域の方、実習で関わった先生方や子どもたちなど多くの方々のおかげです。これからも人との出会いや学びの機会に感謝すると同時に、現状に満足することなく常に成長し続けていきたいと思います。

表紙のことば

菊川　國夫（昭三三卒）

若くて元気な頃は、年に十回以上、毎月のように展覧会出品をしていた。けっこうそれで作品作りを楽しんでいたのだが、八十歳を越えるとだんだん苦痛になってきた。何を書くか、素材に困らないように書作ノートを若い時から作っており、その点は準備おさおさ怠りはないようにしている。ところが書きたい素材があっても、今は若い時のように豊かな発想が湧いてこないのである。年はとりたくないものだ。

平成二十九年だったか、小松高校へ転勤した時（昭和三十八年）の教え子から作品揮毫の依頼があった。NHK・TVでガンジーのことばで出てきたそうで、それがこの語である。それを私に書いてもらいたいと思ったのである。私もいい素材だと思い、一つ展覧会を控えていたので制作したのがこの作である。

平成三十年六月、東京都美術館で開催された「独立選抜書展」に応募し入選することができた。

明日死ぬと思って
今日を生きなさい。
永遠に生き続けると思って
学びなさい。

今年米寿を迎えた私にとって強い励ましのことばと思っている。余生というが、学びの姿勢を崩さないように、永遠に生き続ける思いを抱いている。

部活動紹介

愛媛大学フラワーデザイン研究会

私たち、愛媛大学フラワーデザイン研究会は三十年前から活動しており、現在四回生一名、三回生四名、二回生七名、一回生三名の計十五名で活動しています（令和四年十一月末現在）。

愛媛大学フラワーデザイン研究会は以前、課外活動第一共用施設にある部室で活動をしていましたが、コロナ感染対策のため使用できず、代わりとして松山市ハーモニープラザという場所を借りて活動しています。一時期は、感染予防のために活動を休止していましたが、現在は月三、四回程度、活動時間は約三時間を目安に活動を再開しています。新入部員歓迎会や打ち上げなどは実施することができませんが、見学・体験はいつでも歓迎していますので、気になった方は愛媛大学フラワーデザイン研究会まで気軽にご連絡ください。質問があればいつでも受け付けています。

〈活動状況〉

私たちは、一級フラワーデザイナーである二神光香先生の指導のもと活動しています。月数回の活動時に花束・ブーケ・コサージュ・ブリザードフラワーのアレンジ・クリスマスリース・しめ縄飾り・ハロウィンのアレンジ・バレンタインのアレンジなど様々なものの制作をしています。自宅で楽しめるものや友達にプレゼントするものを制作したり、先生の指導のもとで基本的なフラワーアレンジメントの勉強をしたりすることができます。さらに卒業した後も大人クラスとして月一回有志で集まり、日本フラワーデザイナー協会の資格単位取得のための勉強もしています。県外から制作に来られる方もいるので、大人の方もぜひ二神先生主宰のMIKA Flower Schoolにいらしてください。

また秋の大学祭では、部員が制作した約百点の作品を販売し、箱庭・コサージュ・スワッグ・ハーバリウムなどの体験会を行ってきました。コロナの影響で学外者が参加できない状況となっていますが、規制が緩和された際にはぜひ購入・体験にいらしてください。

〈ボランティア活動〉

松山市の依頼を受けて、松山市ハーモニープラザで親子体験教室を開催しクリスマスツリーの制作をしました。器にはオアシスの上に体験者の好みでサツマスギを挿してもらっており、実際に生きているサツマスギを使用しているため水やりや時間経過でサツマスギの状態や色の変化を楽しむことができます。楽しそうにクリスマスツリーを制作する親子を見て部員一同とてもやりがいを感じ、また機会をいただけるのであればこのボランティア活動を続けていきたいと思っています。

愛媛大学フラワーデザイン研究会

Twitter
@hanaken_ehime

メールアドレス
hanaken.ehimedai@gmail.com

先輩を偲ぶ

あしあと(8)

先輩たちのあしあと

（教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋）

思い出など

愛媛県師範学校
島田鶴四郎氏寄稿
（大正五卒）

一、在学中のこと

山路校長先生　学校管理法を教えられたが試験の場合には教科書携帯差支えなしであった。しかし平素不勉強の者には答えられない出題であった。生徒の日誌を点検せられて評価されるなどやはり常人の及び難い所であった。お墓を東京へ移される時の法要に列して泣きながらご恩を述べられる者もあり印象は消えることがない。

塩月先生　最初の時間に額の汗をふかれながら松山がこんなに暑い所とは思わなかったと言われた。休みの時間にテニスに興じられたせいである。「君は形はうまくとるんだが彩色はなっていないよ」と言われてギャフン。大正天皇ご即位ご大典記念の展覧会に二部からただ一人出品したことを賞されたりもした。愛媛の画壇をリードされたのは後日のこと。色黒々とたくましかったご風姿は忘れられない。

遠山先生　習字の時間中ほとんど一言も発せられず、コトコトと机間巡視をされ、私の側ではしばらくたたずまれたりなさった。あのずんぐりとした白髪のお姿も懐かしく思われる。

内田先生　色白で小柄ながら内に烈々たるものをひめられていたかのようであった。校内音楽会に二部生十余名が田村藤兵衛君の伴奏で「ふけゆく秋の夜……」と歌ったことも印象的である。

赤井先生・山本光二先生・山本浩堂先生のことはすでに同窓会報に載せているのでここでは省略する。

専攻科では佐但校長・増野先生・石川主任・有馬先生・野口先生など印象深い先生方が多いが紙数に制限されて省略せざるを得ないことを遺憾とする。

二、卒業後最初の赴任地

「上浮穴郡弘形尋常高等小学校訓導に任ず」という辞令を手にして着任したのは、景勝御三戸に程近く校庭の桜がらんまんたる四月三日であった。本校が三学級の外に分教場があり、これでも当時は郡内二流の学校であった。同期生は明神に五十崎、久万に石田、弘形に自分、柳谷に松本、久主に稲葉と国道に沿うて配置された。元川校長古谷訓導共に師範出で、如才のない校長は「父ともなり母ともなって」とあいさつせられた。自分は四五六年生三十二名の担当である。六畳の宿直室で自炊生活。日曜日には久万町まで歩いて石田君と語り合い、寒い日には湯豆腐で一ぱいを楽しんだ。二年目に師範実習生一行の参観があり、桶狭間の戦の授業に対して忌憚のない批評を受けたりした。在職二か年間に石槌に登り、大野ケ原を訪ね、羅漢穴をくぐるなど郡内を歩き回ったものである。

思い出の御三戸橋で（昭42．4．6）

当時の教え子達と御三戸橋で五十年目の再会をして往時を懐かしんだ。同期の五十崎君ら四名はいずれも物故されて淋しい思いである。

三、最終の学校

新制中学ができると心ならずも中島中学校長に任命せられた。新制度の学校長には新進気鋭の士を充てるべきだとの主張がいれられなかったわけである。しかし懸命にならざるを得なかった。建築中の青年学校々舎一棟に一年生を収容し、二三年生は東小学校の借教室での授業だった。先生は二キロの道を往復する不便さであり、もどかしい一か年を経てからやっと三棟の本校建築が成ってうれしい落成式をあげることができた。ところが落ちつく間もなく青年学校制度の廃止によって学業半ばに投げ出された生徒中から何とかして欲しいとの要望があったので、県当局の意向をさぐり生徒の募集にあたるなどして昭和二十三年十月北温高校中島分校の設立を見たのであった。その後半か年間は分校主任として遺漏なきを期し翌年四月専任にバトンを渡した。それにしても当時は高校設置に対する認識不足から現在の俊成薫県議（高校認置熱望の生徒）が反対者からの圧迫に身体を張ったことを書きそえておく。

百周年記念誌に寄せて

愛媛県女子師範学校
横山　尚代氏寄稿
（大正一〇卒）

奇しくも、私は、男師付属校に八年、女師校に一八年、合わせて二六年の長期にわたり、文字通り母なる育ての学校ですから、この栄ある一〇〇周年をただごととして、傍観するわけにはいきません。従来「同窓会報」にも原稿のご依頼を受けながらも、筆不精を続けてきましたが、このたびはそのおわびもかねて、拙文ですが、思い切ってお祝いの気持ちを次のような形で表わす決心をしました。

㈠　付属小学校時代

当時の付属学校は、男師本校の北側にありましたが、市内電車の開通によって、木屋町をへだてて、松山城下に移転いたしました。

学校は一部と二部に分かれ、一部は特殊な構成で、一年から六年まで各学年八名で、合計四八名が一学級でした。教室には毎時、必ず参観人があり、モルモット教室の感を深くしました。

毎年一〇月一五日の恒例の運動会は、まるで松山のお祭りのようなにぎわいで、門の両側・道路は屋台店が並び、杉のアーチや来賓・音楽席が設けられて、オーケストラ伴奏つきの入場や、遊戯・競走でした。ことに、私たち一部の演技「われらの兄弟」というのは、目玉商品のように大かっさいの呼びもので、大はりきりでした。

㈡　女子師範時代

私が入学しましたのは大正六年

でした。そのころの入試は数学・国語・地理・歴史・理科の五教科でしたが、数学以外は毛筆で、墨汁を下げて試験場に入りました。今考えてみますと全く隔世の感がいたします。

全寮制で、地元三津の人も、松山の者も、全員四年間は寄宿舎生活をすることを当然のように考えていました。そして、軍隊生活とまではいかなくても上下の関係がきびしくて、入学当時、ことに付属から入学した私たちへの風当たりは強く、髪の結い方から、着物のがら、朝のあいさつまで室長会の問題にとりあげられて、そのたびに何かお小言をいただいて、初年兵の苦労を味わいました。

私の在学時代の思師で今なおご健在の先生は、奥村秀吉・葛西喜惣右衛門・簇持国・大三輪房子の四先生方で、どなたも傘寿を超えられて、それぞれ東京・千葉・京都のご家庭で幸せな老後をお暮らしになっていられます。どうかいつまでもご多幸ならんことをお祈り申し上げます。

㈢　白楊会

女子師範学校同窓会の「白楊会」につきましては、先輩の波頭タネ姉がご執筆下さると思いますが、蛇足ながら一筆書くことにいたします。

それは、私が母校に着任後、間もなく五月に、定例の校友会総会が開催されましたけれども、同窓会のことはほんの申しわけ程度でした。そこで、同窓生の一人である私はさっそくに、豊田校長・田中トミノ先生に、ご相談に乗っていただいて、ここに初めて同窓会独立の胎動が始まったのであります。ちょうどその時、専攻科第一回生として、波頭タネ姉が再入学して来られたのを幸い、力強い協力者になっていただいて具体的に乗り出し、白楊会を結成したのでした。

㈣　白楊会館

白楊会館につきましては、建設の次第等、詳細に述べたいのですが、残念ながら制限紙数も尽きました。

私は、ただ一つ、決断をふるって、ここに白楊会員の皆様に請願いたしたいことがあります。それは、この母校一〇〇周年記念事業に対して、白楊会員として思い切って、この会館を愛大教育学部同窓会に差し上げては、いかがなものでしょうか。この一事が申したいために、拙いこの一文をあえて私の祝意として申し上げたいのでございます。長い間この問題が脳裏を往来し、神のかすかな声なき声に促され支えられて、やっと本音をはかせていただきました。どうか微意、おくみとり下さるならしあわせに存じます。

教育学部創設期のころ

愛媛大学教育学部　白方　勝氏寄稿（昭和三〇卒）

私が愛大を受験するころは、「どこを受けても通らんやつは、愛大の教育学部を受けろ」と仲間からよく言われたものである。旧制松山中学以来のプライドがそう言わせたもので、彼等には一期の有名校を目指すのがあたりまえで、愛大の、しかも旧師範系の教育学部は、大学のうちに入っていなかった。高校三年間、小説ばかり読んだり書いたりして暮らし、何一つ受験勉強をしなかった私は、仲間にちょっぴりさげすまれながら、しかしこれよりほかに自分の道はないと思いながら教育学部を受け、みごとに合格したのである。

入学してからも、旧制松高の伝統を持つ文理学部に対し、教育学部学生は何かと軽くみられがちであった。また事実、私に代表されるように学力も低かった（と思われる）。いっしょに文理へ入ったTなどは、高校中に数学を独力で学び、教授から、お前に教えることはないと言われた。そんなわけで、文理へ転学部するものもいたし、私も教養の補導教官から転学部をすすめられた。

一方、教育の方でも文理優位に対する反発もあった。学生だけでなく、教官の方にもあったようである。それが昂じて、ついに教育原理担当のY教授の文理学生の受講拒否事件が起こった。この単位は免許状取得には必修の科目である。「真に教師になりたければ、教育学部に来ればよい」というのがY教授の言い分であった。当時自治会の役員にひっぱり出されていた私は、他の役員とともにY教授に事情聴取に行ったりした。Y教授の熱意はわかるにしても、それは文理コンプレックスを正しく解決する道ではなかった。この時、私はけっきょく文理に対抗できるようになるためには、単なる反発ではなく、学生自身が勉学の上で力をつけていくよりほかはないと思った。

国語科の先輩は、その点でがんばってくれた。第一回生の創設した国語国文学研究会や同会報は今も続いている。その活動ぶりは逆に文理の先生方を羨しがらせたりもした。国語科は両学部教官に反発も溝もなく、何事も協力してやっておられたようで、私などは専門課程に入ってからも、文理の講義を受けに行き、変わらぬ指導を受けた。二〇分の休み時間に私は持田と城北を往き来した。当時はスクールバスもなく、雨にも負けず風にも負けず歩いて通ったものである。こうして私はむしろ文理学生をよきライバルと目指していた。

もう一つ文理に対して教育にないものがあった。木である。持田には旧制高校の銀杏並木が残っていたが、松山連隊練兵場跡の城北は、兵どもの夢の跡よろしく夏草こそ茂れ、涼をとる木陰は一つもなかった。新しく植えた木はあったが、まだ身の丈にも及ばなかった。この殺風景にはさすがにまいったという記憶がある。

しかし、それでも私は四年間を楽しく過ごした。私の半生で最も充実した時期であったといってよい。それは勉強面だけでなく、先生方と親しく交流する面においてもしかりであった。いい季節になると、武智正人先生は我々を誘ってくれた。この周辺の山々をよく歩いたものである。五明で雨に降られ、祝谷の武智先生宅で衣を乾かせたこともあった。この年中行事はそれから後も長く続いたと聞く。四年生の時には中島キャンプにも行った。このときは学部長になられた重松信弘先生も参加された。カンカン帽に海パン姿の先生の写真は珍しいのではないかと思う。こんな話を今の学生にすると、ちょっと信じられないといった顔をする。これを書いた機会に、歳をとったが私も山歩きの必要を感じている。

卒業後も各先生には変わらぬご指導を受けた。私は教育学部に学んだ幸福とプライドを今も強く持っている。

国語国文学研究会中島キャンプ（昭29．7）

自然に親しむ（昭28.秋、福見山）

会員の声

そして、戦後

井手窪　理
（昭三七卒）

一九三七年（昭和一二）七月七日深夜、北平（現北京）の西南約六キロの盧溝橋付近に数発の銃声が響きました。これをきっかけに日本軍と中国軍が衝突します。

この年より全国的に「千人針・慰問袋運動」が盛んになりました。千人針は、晒（さらし）に千人の女性が一針ずつ赤い糸で縫って結び目をこしらえたものです。肌につければ弾丸がさけられるとされ、戦争が始まると出征する夫や子どもの無事帰還を祈って、協力を請う女性の姿がよく見られました。

愛媛県歴史文化博物館専門学芸員平井誠氏は次のように述べています。「千人針は日露戦争の頃に広まった弾除けのお守りである。『千』には『大勢』や『たくさん』という意味がある。通常は一メートルほどの横長い白布に、玉結びを作る。女性は男性に千人針を贈って戦場での無事を祈り、兵士となる男性は贈られた千人針を腹に巻いて戦った。

千人針は一人一針が原則だが特例が存在した。寅年生まれの女性は、年齢の数だけ玉結びを作ることができた。これは『虎は千里往って千里還る』の言い伝えにあやかったものと言われている。しかし、ほかの理由も考えられる。千人の女性に玉結びをお願いするのは簡単ではない。早く千人針を完成させる方法として干支の中でも強いイメージがある虎に特例を設けたのかもしれない。当時、寅年の女性は重宝されたという」（愛媛新聞令和四年一月九日「えひめの歴史文化モノ語り」）

私の母も叔母も寅年なのでよく頼まれました。

一九三九年二月　軍需物資の原料不足深刻化　商工省が郵便ポスト　公園などのベンチ鉄製品十五品目の回収を開始

一九三九年四月　米穀配給統制法公布　米穀商出店の許可制などを決める

一九三九年七月　国民徴用令公布　軍需工場などへの強制徴用が可能。八月一日同令による初の「出頭要求書」を建築技術者に送り、合格者に「白紙」の徴用令状を送付

一九四〇年一月二六日　日米通商航海条約が失効し、日米無条約時代に入る

一九四〇年六月二二日　文部省が修学旅行を制限　四三年からは全面中止（私の父は、この頃伊予郡中山町永木国民学校に奉職しておりやはり実施できませんでした）

一九四〇年七月二六日　米国のルーズベルト大統領が石油・屑鉄を輸出許可品目に追加　三一日航空機用ガソリンの西半球以外への輸出禁止

一九四〇年七月二七日　大本営政府連絡会議で「世界情勢推移に伴う時局処理要綱」を決定　武力行使を含む南進政策を決める

一九四〇年九月一九日　御前会議で日独伊三国同盟締結を決定

一九四〇年一〇月一二日　首相官邸ホールで大政翼賛会発会式　総裁は近衛文麿首相

一九四〇年一一月一〇日　紀元二六〇〇年祝賀式典が宮城前広場で挙行される　一四日まで各地で提灯行列・音楽行進など多彩な祝賀行事　赤飯用のもち米特配

一九四〇年一二月二九日、米国のルーズベルト大統領は「炉辺談話」でアメリカは民主主義の兵器廠となると述べる

一九四一年三月一日　国民学校令公布　四月一日から尋常小学校を国民学校と改称

一九四一年四月一三日　モスクワで松岡洋右外相が出席し、日ソ中立条約調印　満洲と外蒙古の領土保全と不可侵を声明

一九四一年一二月八日　日本時間午前二時過ぎ、マレー半島コタバルに日本軍上陸敢行。同三時一九分　海軍艦載機がハワイ真珠湾の米軍基地に攻撃開始

あれは私が小学校に入学するより前だったかと思います。モノクロームの映像が脳裏にあります。わが家の八畳の間に親戚と思われる人が十人くらい車座に座っています。何か沈痛な雰囲気です。今、想像するに福岡市に住んでいた祖父の弟の家族か横浜市に住んでいた弟の家族だったのではないかと思っています。疎開してきたか、引き揚げてきたのでした。

一九四二年四月一八日　米国が日本近海の航空母艦から陸軍のB25双発爆撃機十六機を発進させて初の日本本土爆撃　東京・大阪・名古屋・神戸などを爆撃　爆撃の直接的損害はごく軽微だったが心理的効果は大きかったといえる。

一九四二年六月五日　ミッドウェー海戦　空母同士の航空決戦だったが、日本側は空母四隻を失い、米国側は参戦三空母のうち一隻を失っただけで、日本連合艦隊の大敗北　戦局の転回点となる。

一九四四年八月四日　閣議が国民総武装を決定　竹槍訓練始まる　東京都区内の学童疎開第一陣が上野駅から出発

一九四四年一一月二四日　サイパン基地を出発したB29爆撃機約八十機が東京を初空襲

一九四五年二月一五日　沖縄の陸軍第三十二軍米国機動部隊接近で軍と県民に「一機一艦、一人十殺」などとする「戦闘指針」を通達

一九四五年三月一一日　鹿児島県鹿屋基地から南方への特攻出撃が始まる

一九四五年六月八日　天皇臨席の最高戦争指導会議　本土決戦の方針を採択

一九四五年六月三〇日　本土の空襲激化　B29に加え、沖縄や硫黄島からの爆撃機、戦闘機に加えて機動部隊の空母艦載機が地方中小都市に至るまで爆撃

一九四五年八月六日　B29が広島に原子爆弾投下　九日　長崎に原子爆弾投下

一九四五年八月一〇日　政府が中立国スイス、スウェーデンを通じて米国、英国、中国、ソ連へ国体保持を条件にポツダム宣言受諾を申し入れ、一二日に回答

一九四五年八月一四日　天皇の裁決でポツダム宣言無条件受諾を決定

一九四五年八月一五日正午　天皇の「終戦の詔書」録音放送

一九三九年（昭和一四）私の母は私を長男として生んでくれました。三年後の昭和一七年次男が生まれました。そして、昭和二一年一月三男が生まれました。章（あきら）と名付けました。色の白い子だなあという印象が残っています。その四日後、はかなくも亡くなってしまいました。死因は聞いていませんが、私は、母親の栄養が不十分で、母子ともに体力が弱かったからではないかと思っています。亡骸は、祖父の実家の墓地に埋葬しました。土葬だったと思います。

母は身重（みおも）で終戦を迎え、一子（いっし）を亡くしました。

一九五一年（昭和二六）伊予郡中山町立中山小・中学校にボーイスカウトが結成され、私も入隊しました。伊予一三隊です。写真は秦皇山（しんこうざん）登山記念です。（写真1）

写真1

なお、本誌前号第一三四号二〇頁私の拙文の「秦高山」は誤字です。ちなみにこの山は、愛媛県中予と南予のいわば分水嶺の一つです。

一九五二年（昭和二七）私は中学生になりました。大工の祖父が机と椅子を作ってくれました。それを朝から晩まで見ていたと私の日記に書いています。現在も私の家の台所に残っています。（写真2　昭和三四年　机・椅子の前にて）

写真2

一九五七年（昭和三二）七月私の祖母が亡くなりました。私たちにいろいろな野菜、さつまいも、麦、小麦、とうきびなどを作ってくれました。もちろん私たちも少しは手伝いましたが……。夜も土間に座って炭俵を作ったりとともにかくよく働く祖母でした。体調をくずしての六三年の生涯でした。

祖父は、菩提寺（じ）の積翠山盛景（じょうけい）寺の通称赤門の横に井手窪家の墓を作り、埋葬しました。その時、十一年前に亡くなっていた弟章（あきら）もその墓に埋葬しなおしました。

一九七六年（昭和五一）かつて父が勤めていた伊予郡中山町永木国民学校昭和一九年度卒業生の先の戦争のため実施できていなかった修学旅行が実施されました。お世話下さったのは、その当時の児童の峯本高義氏です。愛媛大学教育学部同窓会の副会長等の役員を長年していただいた方です。

写真は八枚郵送していただいた中の一枚です。（写真3）写真の裏に父の字で「昭和五十一年八月二十二日㈰撮影　別府　海地獄にて」とあり、卒業生と父の名前が書かれています。同封されている手紙。

「念願の修学旅行　楽しくすごせたこととうれしく思っています。全員が参加できなかったことは残念ですが、それぞれに生活があり一家の責任者としてがんばっている身ですのでいたしかたないと思います。それにしても、たくさんの方が参加できたことを皆でよろこびたいと思います。

先生もお元気でご参加いただき昔にかえって私たちにいろいろと有意義なお話を聞かせて下さり、ありがとうございました。（中略）みなさんの楽しいお話や笑い声が今も耳に聞こえてくるようです。又、次にお会いできる日を楽しみにしています。」

写真3

〔参考資料〕
1　朝日クロニクル「週刊二〇世紀」　朝日新聞社
2　永木小学校　開校百年記念誌　一九七五
3　学友日記　一九五四

井手窪理
㊐791-3203　伊予市中山町出渕二－一四五－一

「教行信証」に新しく校閲された訳者の序論
―大拙・T・鈴木―

吉原　宏文
（昭四二卒）

今年もまた、広島市の平和記念式典の日が訪れた。七十七年前、広島市に原子爆弾が投下され、沢山の生命が奪われ、まさしく地獄絵図となった。今、ロシアによるウクライナ軍事侵攻で、核の脅威が再び現実のものとなろうとしている。

広島市長・松井一実氏が、今年も「平和宣言文」を発表された。その中で、〝また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、『戦争と平和』で知られる、ロシアの文豪・トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉を噛み締めるべきです。〟（令和四年八月七日の中国新聞より）

この言葉に、私も深く感動した。松井市長は、憂いを含んだ、被爆者の悲しい心情を反映するかのような優しい眼をしておられる。私は、市長の眼は菩薩の眼そのものであると確信している。大拙博士は、我々の住むこの娑婆世界は、悪魔と菩薩との鬩ぎ合いの世界であると言っている。悪魔は手強い。しかし、我々被爆者は戦わなければならない。坪井直氏が言われた。Never give up! No more Hibakusha! No more Hiroshima!と。

さて、私の大拙博士の英訳「教行信証」の研究も新たな段階へと進んで行くであろう。

浄土真宗（浄らかなる国土に向う真実の宗派）は、鎌倉時代、親鸞によって、大乗仏教の核心に基づき、独自に創造された日本仏教である。その淵源は、源信（九四二―一〇一七）が、四十四歳のとき完成した「往生要集」という著書の指導によって始まった。続いて、法然が「選択本願念仏集」という本を著し、浄土往生のアイデアを更に発展深化させた。その弟子が親鸞である。今日、それは、英語で、真仏教（Shin Buddhism）として、国際的に、新たに進化展開している。

さて、阿弥陀（Amitābha）の物語の全アイデアを築き上げているのは、次の三つの浄土テキストである。即ち、

一、永遠の生命についての大きな経（無量寿経）。二五二年、康僧鎧（Saṃghavarman）によって、漢文（中国語）に訳された。

二、永遠の生命についての瞑想の経（観無量寿経）。四二四年、畺良耶舎（Kālayaśas）によって漢文に訳された。

三、永遠の生命についての小さな経（阿弥陀経）。四〇二年、鳩摩羅什（Kumārajīva）によって、漢文に訳された。

大経に語られているように、阿弥陀如来の物語は、法蔵菩薩の物語である。それは、次のように始まる。即ち、今から無限ともいえる長時（劫）の昔、燃灯仏（Dīpaṃkara）という最初の仏陀がこの世界に出現した。彼は、全ての存在者（一切衆生）を悟りの生活に導いた。彼に続いて五十以上の仏陀が衆生を悟らせる仕事に携わった。

世自在王（Lokeśvararāja・「世界の統治者」）といわれる一仏（one Buddha）が現れたとき、その仏陀によって説かれた驚嘆すべき法（真理）を学びたいと望んで、その世俗的立場を一切放棄して、比丘（家の無い僧侶）になった一人の王がいた。彼即ち法蔵比丘は、世自在王仏の御前に来て、仏位（仏の境地）に達し、あらゆる意味で比類ない素晴らしい王国を建立し、一切衆生を招待し、彼らが皆最高の悟りを成就するよう如何なる難行実践にも耐え忍ぶでしょう、と不撓不屈の決断（praṇidhāna・誓願）を表明した。また、彼の深い愛情と非凡な同情によって、その成果があがるような必要な環境を整備し、時間の終りに至るまで無尽蔵の功徳を蓄積するのに、決して倦むことはありません、と。

そこで今、世自在王仏は二百十億の諸仏の国土を示され、それらの中から善いところを選び取り悪いところを捨て、最も優れた浄土とそこに生まれる摂取（完全に把握）をして、そのような浄土を建立する仕方を法蔵比丘に語った。早速、彼は自ら仏位に到達し、最上の浄土の創設を完成するために、瞑想と禁欲的自己鍛錬の五劫（無限に近い長時）を過ごした。同時に、一切衆生が悟りの境地と恒久平和と幸福の状態に目覚めるようにあらゆる手段を尽した。

更に、世自在王仏は、法蔵菩薩に勧進する。「若し人が終わりのない永遠の修行実践を続ける決心をするならば、大海の水といえども、バケツ一杯の水を、一度だけ、攫って行くことによって、大海の底にまで汲み尽すことができるであろう」と。これは驚くべき名言である。若しも、法蔵菩薩の決意が、偉大な意志あるいは深い同情（mahākaruṇā・大悲）と完全に一致していなければ、彼の祈り（praṇidhāna・志願）の成功を期待することは、決してできないであろう。

大経は、法蔵菩薩の祈りに触れる四十八の項目を指定する。それは、日本語で彼の誓願あるいは単に願として知られている。

この法蔵菩薩の物語を続けると、以下のごとくになる。阿難が釈迦牟尼仏に尋ねる。即ち、「法蔵菩薩は彼の全ての帰依者を導いて行く浄土の構築を実現していますか？　皆が最高の悟りを獲得したことを確認していますか？　浄土の完成のために、彼の全存在で準備した意志力の極限にまで、自己鍛錬の長い長い時間を乗り越えてきていますか？　今、平和で幸福のこの国土は成立しています

か？　それは何処にあるのですか？　如何にして設置されたのですか？」

仏陀が答える。「浄土は、今、菩薩の倦むことなき忍耐（kṣānti・忍辱）とどんな存在者によっても超越されない尽力（vīrya・精進）の御蔭で建立された。それは、人間の国土（sahālokadhātu・娑婆世界）から離れた西方十万億仏土に位置していて、筆舌に尽し難い美しい光景で、全てのものが完璧に荘厳（vyūha）されている。」そして、経の編集者は、我々のために、美と調和、清浄と聡明の情景を描写し、居住者の生活を内的にも外的にも包み込むために、彼の知識と想像の限界内で最善を尽す。

今、Amitābha（あるいはAmitāyus）仏として知られている法蔵菩薩は、思いやりのある心と不動の意志の結果として成立する平和と幸福のこの国土を統轄する。Amitābhaは「無限の光」を意味し、Amitāyusは「永遠の命」を意味する。そのように資格づけられた存在者あるいは人格から出てくるものは、創造者自身のそれと同じ資格を自然に相伴する。阿弥陀仏の浄土は、無限の驚嘆する国土である。それは、我々全ての有限存在者が一度この国土に案内されない限り、有限と限界のこの娑婆世界を特徴づけている、全ての恐怖と危険、悲惨と困惑のない自由な生活を経験することはできない。ここで、最も重要なことは、真宗の開祖で「教行信証」の著者である親鸞聖人がしたのであるが、浄土そのものの描写ではなく、浄土に向って我々を導く方法である。この世に生きている間、絶えず我々を苦しめ、より私的に、より即座に、より痛切に影響を及ぼす、気苦労と疑念のあらゆる形式から我々を解放し自由にする手段である。それでは、何が教化と救済の手立てであるのか？

とりわけ、第十八願は、最も意義深く重要な声明として浄土宗によって、四十八願から選ばれた一願である。この願は、その心酔者を阿弥陀国に生まれる存在者になれると、絶対に約束する。若し、彼らが阿弥陀仏の名前を発音（称名）し、心の底から誠意を込めて一度でも阿弥陀仏を念ずる（念仏）ならば、間違いなく救われると断言する。一見すると、この祈り（願）は、信者の方では、極めて簡単で易しく響くかも知れない。しかし、我々がこの願の真下に横たわるものを精査するとき、その存在の基盤を構成し、そこに埋め込まれた観念を見出す。それでは、この観念は何か？

㈠　無限の光（Amitābha）即永遠の命（Amitāyus）であり、阿弥陀仏の人格において自らを体現する存在者がいる。彼が、法蔵（「真理の蔵」）菩薩として存在しているとき、世自在王（「世界の統治者」）と呼ばれる仏の命令によって、無限ともいえる長時（劫）の自己修練を体験することによって、阿弥陀仏の仏位に到達した。無限の光は絶対の道理（mahāprajñā・大智）であり、永遠の命は絶対の愛あるいは深い同情（mahākaruṇā・大悲）である。ここで、仏陀と菩薩の違いに注目しなければならない。仏陀は至高に啓発された存在を意味し、一方、菩薩は「悟りを目指す存在者」である。至高の悟りは、反感（敵意）と矛盾の世界を超越している。仏陀においては、その全ては確認され、命題としては存在しない。菩薩は、悟りに向う存在において、まだ力学的に、究極の主体性の実現に向う過程にあるように感じられる。

菩薩は、力学的に、全存在者が各々、善と悪、光と闇の神秘的秩序に一致して生きている自己矛盾の世界で働き、あるいは生きている一個の仏陀である。その仏陀は、全存在者の間で、個々に詳述された関係者の形で、自らを意図して見えるようにされるものと考えられるかも知れない。菩薩は絶対の愛（mahākaruṇā・大悲）が全存在者の間で自らを証明している仏陀の一変様体である。絶対の理性（mahāprajñā・大智）は、ここでは、いわば、多数性あるいは個別性、即ち時間と空間の世界において、覆い隠されている。言い換えると、仏陀そのものが、「形のない空虚」で、目に見えない、近づけない、区別できない、不確定なものであるのに対して、菩薩は全存在者のために活動中の仏陀である。

阿弥陀仏の三位一体は、この観念の象徴である。阿弥陀仏は、右側に、観音（Avalokiteśvara）そして左側に、勢至（Mahāsthāmaprāpta）によって付き添われている。勢至は「力」（sthāma）即ちprajñā（智慧）を、観音は「愛」（karuṇā）を表現する。文殊菩薩（Mañjuśrī）・智慧（prajñā）と普賢菩薩（Samantabhadra）・大悲（karuṇā）をもつもう一つの仏陀の三位一体がある。

㈡　阿弥陀仏は、無限の光と永遠の命との両方を自身で具現し、遠心的と求心的という二つの仕方で、自らを明らかにする。往相回向として知られる求心的運動は、全存在者を阿弥陀仏の方へ動かしめ、平和と幸福の浄土を彼らの究極の避難所として造る運動である。阿弥陀仏の遠心的運動は、阿弥陀仏の領地の全信者を、彼から離れしめ、もう一度、時間と空間の重い心労のもとで未だ過酷な生活を長々と続けている彼らの前の娑婆世界に帰らしめ、仲間の存在者のために働かしめる運動である。これが還相回向と呼ばれる。

こうして、我々は、普遍的救済のための運動として、阿弥陀仏から流出する運動は循環的である、と理解する。即ち、全存在者経由で、阿弥陀仏から出て行き、再び阿弥陀仏に帰ることである。言い換えると、全存在者が、彼ら自身の功徳によって、彼ら自身から出て行くと心に描くものは、実際には、阿弥陀仏の無限の光と永遠の命から得るものである。悟りを目指す全存在者（一切衆生）は、実は、彼らの故国に戻って行くことである。従って、阿弥陀仏は彼らの「親様」である。　（続く）

二〇二二年（令和四年）八月十二日㈮お盆を前にして。今日は、群馬県上野村の「御巣鷹の屋根」の日航ジャンボ機墜落事故から三十七年を迎えた。（歌手の坂本九ちゃんも犠牲になった。）

〒731-0135　広島市安佐南区長束一丁目一八－五－五

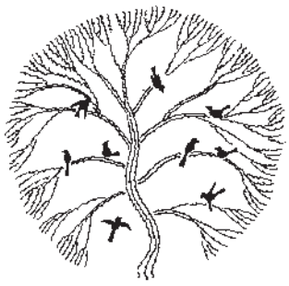
句集『正面』より

島津　教恵
（昭三五卒）

囀

（昭和六十一年～平成四年）

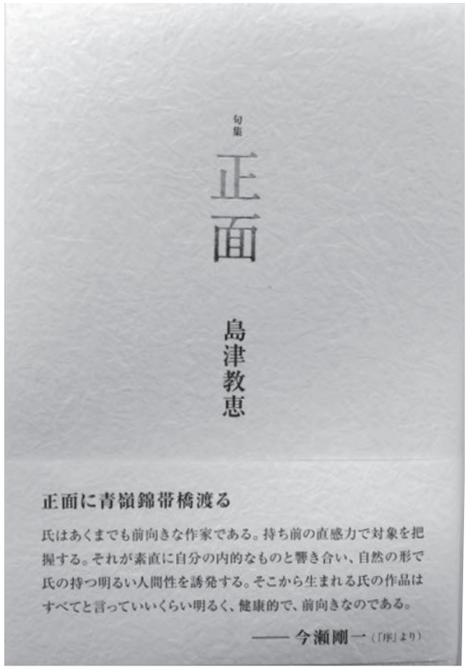
日の当たる方へ囀ひろがりぬ
湖に雨来ては去り蜆汁
航跡の集まり島の御開帳
沢蟹に干潟ゆつたりひろがりぬ
一筋の濁流を入れ梅雨の湾
父がその父を語りぬ夜の秋
杉山の白き雨脚九月来る
教卓の竜胆けふは無欠席
かつきりと目をあけ鹿は角伐らる
郷土史に数多のいくさ虎落笛



初暦

（平成五年～平成十年）

未知といふまぶしさ束ね初暦
花のごと嬰を眠らせ春の雪
正面に青嶺錦帯橋渡る
指先のつめたく螢貰ひけり
大鍋のカレーふつふつ帰省待つ
石鎚山のぶちまけし鰯雲
海へ入る河の広がり草紅葉
赫と陽を集め遺愛の紅葉なり
蝶凍ててまなこ大きくありにけり
コップから胃への一棒寒の水

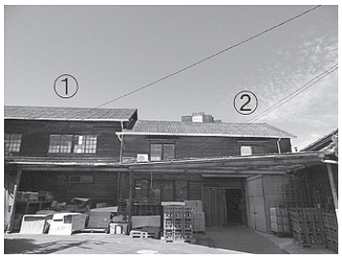


愛媛県女子師範学校校舎を訪ねて

三津浜の「村要商店」に移転され、保存されていた「愛媛県女子師範学校校舎」が解体されるとのことで令和４年７月20日に同窓会役員４名で見納めに訪れました。

愛媛県女子師範学校は、明治43年４月に師範学校より女子部が分離され、温泉郡三津浜町（現在の松山西署近辺）に設置されました。その後、多くの卒業生を送り出してきましたが、昭和18年４月に文部省直轄に移管され「愛媛師範学校女子部」となりました。そうした歴史ある建物が解体されるのは淋しい限りですが、これも時代の流れかなと思っております。以下に、写真で紹介します。

【校舎全景】



当時を偲ばせる校舎
※手前は、村要商店の建物です。

校舎①の裏面

校舎①の側面

※左は、村要商店の建物です。

【内部の様子（階段）】

校舎①の階段（下から見て）

（上から見て）

校舎②の階段

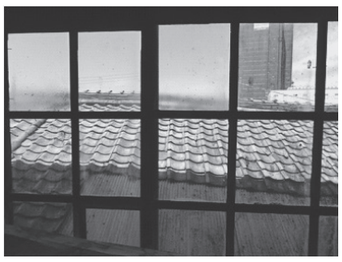
入口を入るとまず急な階段が迎えてくれました。当時もこのように先輩たちが利用したのでしょうか？

【内部の様子（全景）】

校舎①から②に向けて見た内部

校舎②の内部

当時のままの梁



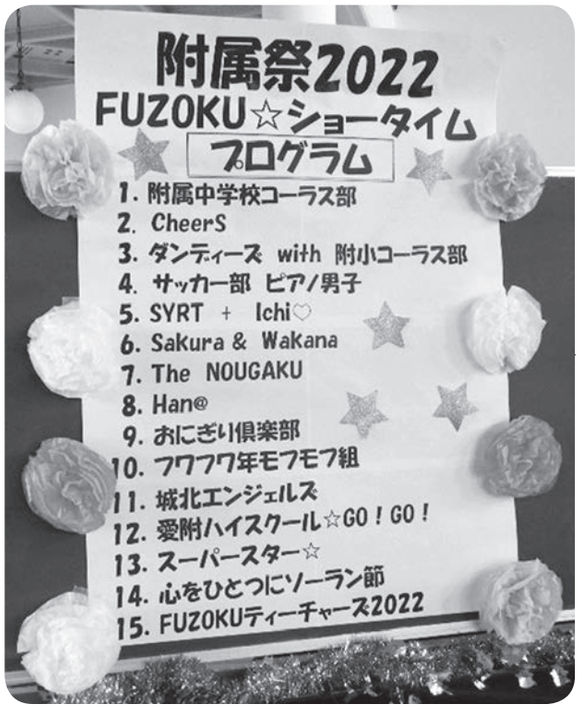
先輩たちが様々な思いで見ていたと思われる当時の窓

残念ではありますが、すでにこの校舎は解体されております。

愛媛県女子師範学校に関する資料や写真がありましたら事務局までご連絡ください。

同窓会事務局

附属祭



教育学部同窓会附属支部長
山内　望

「附属祭」は、附属五校園の連携・発展を目指し二〇〇二年に発足した「附属五校園マイスター倶楽部」（ＰＴＡ・ＯＢ有志で構成）が主催してきた行事の一つです。主な目的は、附属五校園の子どもたちや保護者らが一堂に会し、ゲームやバザー等を通じて親睦を図り、連携を深めることです。今年度は、コロナ禍等の理由から規模を縮小し、十月二十三日（日）の午後、手作り品等を販売する「ミニバザー」と、附属五校園の子どもや保護者、関係者が出し物を披露する「ＦＵＺＯＫＵ☆ショータイム」（以下、「ショータイム」）を行いました。「ショータイム」は、国の有形文化財に指定されている附属中学校の章光堂で開催しました。教育学部同窓会附属支部は、微力ながら前日までの準備の一部に関わらせていただきました。

「ショータイム」で出し物を披露したのは、幅広い年齢層の十五組（約百六十名）で、あらかじめ用意していた参加賞の缶バッチ（附属特別支援学校印刷作業班製作）が足らなくなるほどでした。出し物は、コーラスやピアノ演奏、能やダンスなど、バラエティー豊かで、思わず笑顔になったり、心を揺り動かされたりするものばかりで、時間が経つのを忘れてしまうほどでした。観客は、章光堂の二階席まで満席という、予想をはるかに超える方に来ていただきました。

準備から当日の運営を行っていただいた「附属五校園マイスター倶楽部」のスタッフの皆様の献身的なご尽力のおかげで、改めて「附属五校園は一つ」と実感できる時間を過ごすことができました。心より感謝申し上げます。今年度の「附属祭」を最後に、「附属五校園マイスター倶楽部」は活動を閉じられるそうですが、その精神は教育学部同窓会附属支部も大切に受け継ぎ、今後とも附属五校園の連携・発展のための一助を担っていきたいと思います。

附属祭アラカルト

新型コロナ感染対策をして実施された附属支部の支部活動「附属祭」に髙橋会長と参加してきました。

【ミニバザー】

バザー会場は二つの理科室を利用して実施していました。

【ショータイム】

ショータイム会場の「章光堂」

附属高生の司会でスタート

可愛いチアリーダーの応援

ダンディーズの皆さん

附属幼稚園エンジェル

バンド演奏とダンス

附属高生はビデオ参加

心ひとつにソーラン節

最後は先生たちによる大喜利

様々な年代からの出し物があり、楽しいひとときを過ごすことができました。参加していた地域の方の「やっとコロナ前に戻ってきた気がします。」という言葉が印象に残っています。

校友会ニュース

第13回ホームカミングデイ開催

11月12日㈯、「愛媛大学第13回ホームカミングデイ」が開催されました。

ホームカミングデイは、卒業生の皆様に青春時代を過ごした愛媛松山に、また授業や研究、サークル活動に励んだ懐かしいキャンパスに帰っていただくため、愛媛大学と校友会との共催で学生祭と同時期に実施しており、今回が第13回目の開催となりました。

コロナ禍のため、３年ぶりに現地参加（オンライン同時配信）の開催となり、素晴らしい秋晴れの中、南加記念ホールで行われた式典には大勢の卒業生や教職員ＯＢの皆様にご参加いただきました。

【プログラム】 15：00～　南加記念ホール

・学長挨拶

・特別講演 「コロナとの闘いを経験して　～未来に向けて今、私たちにできること～」

講師　大阪市立総合医療センター感染症内科部長

白野　倫徳　氏（医学部24期生）

・愛媛Food Camp取組紹介　　農学部生命機能学科２年生

・書道パフォーマンス　　愛媛大学書道部

・合唱コンサート　　愛媛大学合唱団

・学歌斉唱　　愛媛大学合唱団

式典では、仁科学長の開会挨拶と大学の近況紹介の後、大阪市立総合医療センター感染症内科部長の白野倫徳氏（医学部24期生）から、「コロナとの闘いを経験して ～未来に向けて今、私たちにできること～ 」というテーマで特別講演がありました。新型コロナと共存する中、予防のための方策はとるべきであり、最低限の感染対策、ワクチン、基礎疾患のコントロールなどリスクに応じて、行動を考えることが重要であるとのご講演の後、質問にも丁寧に回答いただきました。

続いて、愛媛大学農学部の取組「愛媛Food Camp」について、農学部生命機能学科２年生の長見さんと檜垣さんから、新たなインターンシッププログラムにより朝日共販㈱と共同開発した「しらすラーメン」についての紹介がありました。

また、学生団体パフォーマンスでは、書道部によるテーマ「共生withコロナ」の披露の後、合唱団による「つながり」「今、ここに」「愛媛大学学歌」の３曲の合唱があり、会場からの大きな拍手につつまれて閉会しました。

【校友会ＨＰより】

【学内アラカルト】

学内では、第72回愛媛大学学生祭も開催されましたが、感染対策の一環として来場者は愛媛大学在学生、愛媛大学教職員限定（事前予約方式）で実施いたしました。また、飲食物の提供を行わず、構内での水分補給以外の飲食は禁止としたため盛り上がりに欠けた学生祭とはなりましたが、学生たちはそうした制限の中それぞれに工夫を凝らして学生祭を楽しんでいました。

学生祭のテーマは、「Re：スタート」です。 withコロナという新しい価値観をもって今までとは違う学生生活をスタートさせるとともに、withコロナへ希望を持つきっかけとなるような学生祭を成功させるという思いが込められていました。

正門前の看板

学生祭風景１

学生祭風景２

ゲームを楽しむ参加者

手作り作品販売

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では、二〇二三年四月入学生を募集中です。

〈募集期間〉
二〇二二年十一月二十六日㈯～
二〇二三年三月十四日㈫

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は、次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○　放送大学の大学院を利用して、**専修免許状**の取得が可能です。

○　放送大学の科目を利用して、**特別支援学校教諭免許状**の取得が可能です。

○　放送大学の科目を利用して、**司書教諭資格**の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に**愛媛学習センター**までご請求下さい。

会報送付について

会報は、教育学部に関する行事や情報、また会員から送られてくる情報等を掲載し、毎年七月と二月の年二回発行しています。

皆さんにお届けする方法としましては、県外在住の方は事務局からの直接郵送、愛媛県内在住の会員の方は、基本居住されている小学校区の担当者からお届けしています。しかし、希望があれば事務局からの直接送付も選べます。その際は左記の「送料納付」を参考にしてください。ただ、切り替えには、時間がかかる場合があります。その間、小学校区からと事務局からの二冊届くこともあります。ご了承ください。

会報の送料納付について

会報の個人宛発送は、**送料を各自で負担**していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

① 一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっています。

② 二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

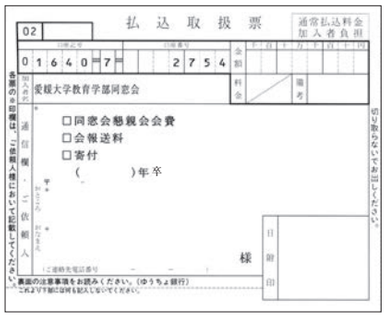
納付期限　毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法　郵便為替・現金書留・郵便振替で振替口座番号
〇一六四〇―七―二七五四

送り先　〒七九〇―八五七七
松山市文京町三
愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれてください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。



用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒にはさんでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていない用紙になります。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

敬弔（物故会員）

（死亡年月日）	（氏　名）
3・9・29	山本富美子（昭25・愛　大）
4・3・31	田所　滝男（昭23・愛　師）
4・4・12	中川マツ子（昭19・愛師女）
4・4・27	花房　勲（昭29・愛　大）
4・5・11	内田　榮（昭22・青　師）
4・5・20	平井　輝雄（昭30・愛　大）
4・6・5	吉岡美恵子（不　明）
4・6・15	伊東二三香（昭30・愛　大）
4・6・16	江頭　暁（教職員ＯＢ）
4・6・18	神野　米一（昭23・愛　師）
4・6・28	三神美津子（昭36・愛　大）
4・6・30	京口　和雄（昭29・愛　大）
4・7・1	平井　直子（昭25・愛　師）
4・7・3	安藤　龍雄（昭28・愛　大）
4・7・11	篠崎　正幸（昭27・愛　大）
4・7・18	千歳　滋（昭31・愛　大）
4・7・21	明星新一郎（昭27・愛　大）
4・7・28	久米　浩（昭26・愛　大）
4・8・4	竹本　輝明（昭31・愛　大）
4・8・10	大院　静子（昭19・愛師女）
4・8・11	片倉　健充（昭31・愛　大）
4・8・17	品川　良雄（昭17・県師二）
4・9・20	竹内　節美（昭29・愛師研）
4・9・21	矢野　義豊（昭26・愛　師）
4・9・21	船田　彌（昭24・愛　師）
4・9・24	松本　清（昭25・愛　師）
4・10・21	示野エミ子（昭24・青師女）
4・11・5	染次　教夫（昭22・愛　師）
4・11・19	伊出　博美（昭28・愛　大）

寄付者名

令和四年　七月～十二月

井手窪　理　様
髙山　達子　様
愛大31同期会　様
代表者
宮内　久司　様

※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます

祝・叙勲

（令和四年十一月三日）

秋の叙勲
☆瑞宝双光章

上田　敏　殿
清水　慶子　殿
谷井　紀夫　殿

会員写真館

会員の皆さんが撮った写真を紹介するコーナーです。
それぞれの地域や会員の皆さんが何気なく撮った写真を事務局にお送りください。
写真送付先：dosokai.ed.ehime@gmail.com

皿ヶ峰の花　№1
今回は、皿ヶ峰山系にひっそりと咲く花々を特集しました。

サルメンエビネ（猿面海老根）

乱獲のためほぼ絶滅。たまたま深山で発見

シコクカッコソウ（四国郭公草）

花は紅紫色で関東地方北部に分布する。
カッコソウの変種　採取等は厳重に禁止

ノビネチドリ（延根千鳥）

何度も盗掘にあっているが、根が残っていて何年か後には再生している

シコクハンショウツル（四国半鐘蔓）

木本性の落葉つる植物で四国に自生し、花の形が半鐘に似ていることから名付けられた

ミズチドリ（水千鳥）

穂状花序に白色の花を多数つけ、花は香りがよい。竜神平にて撮影

キンラン（金蘭）

名前は頭部の大きな葯の形からつけられ、盗掘などによって個体数が減り、出会うのはまれである

ギンラン（銀蘭）

名前は黄色の花のキンランに対してつけられ、キンランと同じ時期に咲く

写真提供：近藤　喬（附属教職員ＯＢ）